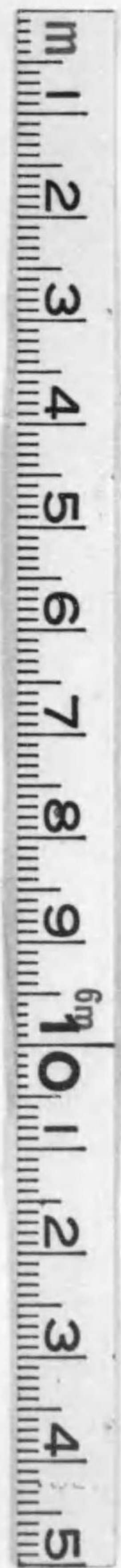
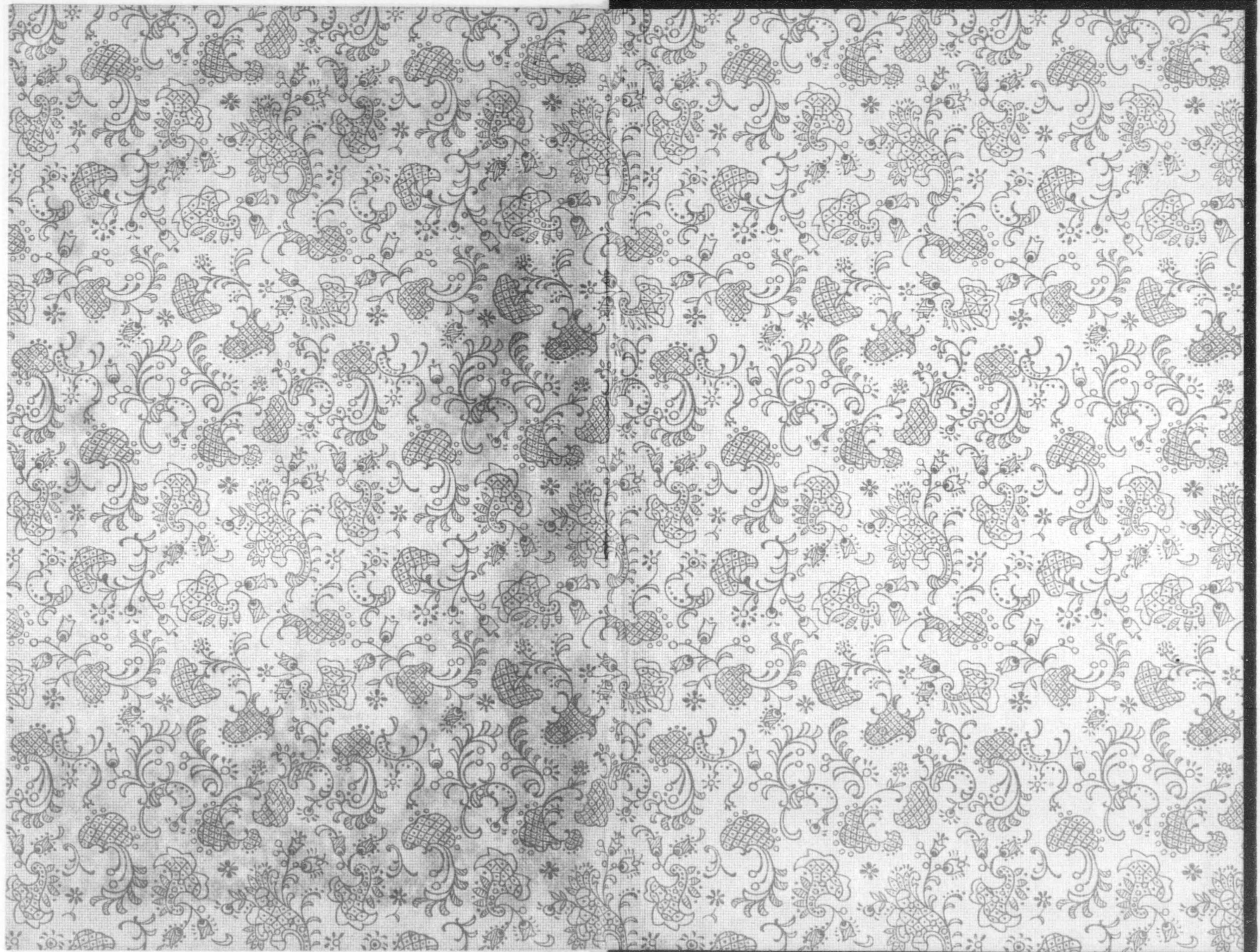


325
5074



始





325
5074



大正
五月
年と日蓮主義





能 一 田 柴 者 著

自序

輓近「日蓮主義」要求の叫びが、日を逐ひ月を重ねるに随ひ、倍々強盛且つ深刻の度を加へつゝあるは、是れ果して何の兆ぞや。惟ふに、維新已來泰西文明の輸入と其に、道德宗教の問題は、あはれ「舊來の陋習」として全く閑却せられ、無信仰の三宗は、返つて文明人士の金看板の如く想ひ做さるゝに到りぬ。然るに自然主義的人生觀上に築き成られたる社會の實狀は、漸次輕薄に流れ華奢に趨き、大小百般の事、概して形式的皮相の粉飾に巧みにして、質實なる精神的根柢を失墜し、加ふるに、新奇を歎ぶ青年士女の弱點に、賣名射利の眼を光らせ、無秩序不用意に移入せられたる新思想の濁流は、滔々として彼等の想海に横溢し、斯くて煩悶と耽溺と無色とは青年分野の三特色とはなりぬ。

翻つて歐洲大戰の経過を觀察するに、開戦爰に三閱年、平和の天使を以て高く自から任じつゝありし米國亦遂に暴獨に對して宣戰の己むなきに到り、南米諸國亦相ひ次で中立を放棄するの狀態となり。斯くて戦後に於ける世界人類の進路は、果して如何に成り行くべきか。斯の如き世界文明の一大轉機に際して、吾人日東帝國の臣民は果して奈何の覺悟と決心とを有せざる可らざるか。

聖日蓮の曰く『法は體なり國は影なり、體曲れば影斜めなり』と。今や正に吾人の眼前に映じ出されたる内外國狀の影が、岌々乎として累卵の危機に瀕せるに氣付きたる人心自然の要求は、其が精神本體たる、思想信仰の問題に對して、眞摯敬虔の態度を表するに至りしものゝ如く、就中、眞面目なる大正青年の多くが、『今正是時』の法華の金言に應じて、隆々として物興の機運に乗じつゝある日蓮主義の研鑽に走らんとする者、日

を逐ふて其の數を増し、適れなる『二陣三陣』の勇姿は、實に『一天四海、皆歸妙法』——道義的世界統一と云ふ大日本國家的世界主義の理想に向つて突進し、世界人心の熱望せる大平和——佛國淨土の建設に最善を捧げむとの至誠の一表現として、邦家人道の爲めに欣喜措く能はざる所なり。

悲しい哉。久しく幕政の壓迫と懷柔とに因つて、知らず識らず去勢されたる聖日蓮の純日本國產的宗教は、素より全佛教の精髓にして、宇宙人生の實相を究め、人間精神の本質を盡くして、有ゆる問題に最後統一的の解決を與へ。大にしは無始無終なる我が生命の久遠性を悟ると共に、小にしては刻々瞬間に於ける己が一言一行に神聖の意義を確認せしめ、法華の正信に住するものは恒に本佛大慈の加被により、國家社會人生に處して其の天分を完成し、自己存在の眞意義の體得によつて、茲に

靈肉一致的救済の妙旨を味ひ、即身成佛、娑婆即寂光の妙理を身證することを得べき活宗教なるにも拘らず、時至らざりしか、弘道の赤誠足らざりしか、耀々たる日蓮主義的眞佛教の光は、長く暗雲の爲に隠蔽せられたりしなり。

今や『戦後經營如何』の問題が、全世界の學者思想家の懸案として、荐りに其が答解を促がしつゝあるの際、亞細亞モンロー主義の唱導と云ひ、日支親善の促進と云ひ、政治に軍事に將た實業に、各々自家獨得の立脚地より、國家百年の大計を劃すること、固より其の所にして、敢て不可あることなしと雖も、吾人日蓮主義者は、日本國體の尊貴なる體義と、釋尊出世の本懐たる法華正法の妙理を開顯して、『法國冥合』の活模範を示し、世界的精神文明樹立の大天職遂行の淨業に向つて、先づ我が國民——就中現代大正の青年の精神を振作統一して、大日本帝國存在の主旨を闡

明し徹底せしめむことを熱望するの餘り、淺學菲才を省みるに追なく、竟に本書を上梓し、以て我か主義の初門に入らむとする青年諸君の東道者たらんとするに至りぬ、冀くは深く著者の不文を咎めず、一點耿耿たる衷心憂國の赤誠を諒とし、本書一讀過、幸に日蓮主義の概念を得なば、更に進んで聖日蓮の魂魄として、骨を筆とし皮を紙として誌し貽されたる、御遺文五百篇の研鑽に指を染め、親しく大人格の雄姿に接して、以て一切生活の根底たり、人格統一の中心たるべき健全なる大信念を發得せられむことを、一言を題して以て序文と爲す。

大正六年四月念八——日蓮主義創唱の聖日
帝都城西淀橋なる常圓精舎の一室に於て

佛子 一 能識す

例言三則

- 一、日蓮主義研究の手引として中等教育以上の青年諸君を主としたものを書いて見たいとは、永年の宿望であつたが、東奔西走の飛脚屋生活の裡に、遂に意を決して本著を公にするに至つたのは、偏へに田中、牧雨君の熱心なる勸奨と助力との賜である。
- 二、時正に中央佛敎會館建設事業の最中で、慶應大學への出勤を除いては、朝から晩までお勤化歩きで、特に執筆の間のない爲に、毎夜就床迄の三四時間を之に充てるの約で、三月の中旬起草、漸く四月廿八日建宗の紀念日に脱稿し、「晝は暇を止め夜は眠りを断ち……」との遺訓を身に讀むことを得た。従つて材料の選擇も意に任せず、組織的の考案も纏まらず、隨處で講演した草案を本として筆を加へ、中には速記者の手に成つたものもあつて自然文體に統一を缺き、重複になつて居る點も少なくない。
- 三、併し初學者へこの願慮から、出来る限り専門の用語を避け、専ら日蓮主義應用の各方面に論及し、言はば日蓮主義の總論に當り、是より後に出づべき各先生の高著は、深さのある内容豊富な専門への研究になつたものであるから、本書は唯だ日蓮主義に對して現代國民——特に青年諸君の注意を喚起するだけの役目を勤むれば我が願足れりである。

目次

序論

- 一 大正の青年とは何ぞ……………一
- 二 大正の青年を救済する者は誰？……………二
- 三 新時代の要求とは？……………一八
- 四 大正文明の特質如何……………二六
- 五 青年自覺の三要件……………三三
- 六 大正の青年と信的覺醒……………四九
- 七 大正青年修養の標的……………五七

本論

- 八 立正安國論の梗概……………九一
- 九 安國論に表はれたる二大主張（其一）……………一二四
- 一〇 同……………上（其二）……………一三四

目次

一 日蓮主義の日本國觀……………一〇九

二 日蓮主義の國體觀……………一七

三 日蓮主義の淨土觀……………一〇一

四 日蓮主義の軍國觀……………二〇

五 日蓮主義の忠孝觀……………二二

六 日蓮主義の教育觀……………二六

七 日蓮主義の女性觀……………三〇

八 日蓮主義の生活觀……………三三

目次

大正の青年と日蓮主義

柴田一能著

大正の青年とは何ぞ



畏友高島米峰君、近頃新たに一書をものし、名けて『二十歳前後主義』と云ふ。未だ閲讀の光榮に浴せざる以上、其が内容の如何は、固より窺ひ知ることは出来ないが、賣出しの看板を見ると……「頭が禿げた、髭が白くなつた、それで老人は心細からずや。活力禿げず元氣白からずんば百歳と雖も以て青年と稱すべきなり。明治維新以來正に五十年。社會の各階級悉く老化し去らんとす。今にして青年の元氣を振ひ起さずんば、我が大正の青年とは何ぞ

大日本帝國の將來を如何せん……とあつて、之を讀んだ丈けでも、老人は衰殘の身を忘れて躍進し、青年は邁往の勇を生じて突撃せむす心地がする。著者の心持を推量するに、單に頭が禿たとか、白髪が生へたとか、小皺が寄つたとか、區々たる外形皮相の末に囚はれて、可惜精神的有爲の青年を十把一からげにして老人の仲間片付け、又自らも老人氣取りで得々然として敢て怪しまざるが如きは、甚だ以て怪しからぬ。請ふ須らく乃公に私淑れよと云ふ見幕で、吾々中青年の爲に萬丈の氣焰を揚げ、人生常に青年時の元氣を銷磨するなかれとの警告を與ふると共に、大正青年の精神的老人氣質に三十棒を喰らはしたものであるまいか。とは言へ「二十歳前後」は、即ち「青年」の公定年齢であつて、元氣有無の論は別として Green-boy —— 青年の尊稱は、今日の所、先づ明治二十七八年日清戰役前後に呱呱の聲を擧げたる世間普通の所謂青年諸君に奉

らざるを得ない。

然り、曆數を以てすれば、今日二十歳前後の諸君は、慥かに「大正の青年」と呼ばるべき特權を持て居るには相違ないが、果して此名に副ふだけの實があるであらうか、實のない名は即ち所謂虛名で是程つまらぬものはない。諸君は果して「大正の青年」たる名實共に之を有せりと斷言し得る確信と勇氣があるか、奈何、吾れ果して這般榮稱に價するの實質を有せりや否やと、眞面目に、正直に、自己點檢を試みた者が果して幾人あるであらうか。本書に言はんと欲する大問題は實に這裡から持ち上がつてくるので、微小なりとは言へ、國聖日蓮の御門下——「若黨共」の一分に加へられたる冥加さに「知法思國」一片耿耿たる赤心の躍動、遂に禿筆を呵するの已むなきに到つたので、返すくも、吾豈に辯を好まんやである。

憶ひ起せば二十年の昔、吾等がまだ諸君の如き二十歳前後の青年たりし時、維新當時の青年たりし中老先生等は動もすると常に吾等に對してヤレ無理想だの、元氣に乏いの、意氣地がないの、馬鹿の呆氣のと、眞向上段より浴びせかけて、盛んに維新當時先生等が若かりし時の、元氣満溢、抱負遠大、劃策縱横、熟慮斷行、實に青年らしき青年であつたと、萬丈の氣焰、メートルの頂點に昇り詰めて何者も當る可らざるの概があつた。所が吾等今や正に其先生等の年輩に達して、今日の青年諸君の如何にも頼み甲斐なく見ゆるに、吾等も亦嘗て斯くの如く先輩等の眼に映じたのではなかつたかなど、現在を思ひ過去を省み、實に今昔の感に堪へない。或は年齢の然らしむる自然の愚痴妄想かとも考へて見たが、併し徐ろに當時の吾等を追懐して見ると、少くとも今日の諸君よりも、確かに正直であり、眞面目であり、小供らしく無邪氣であつた。平生口にし

老年の愚痴が青年の墮落

個人本位と國家本位

大正の青年は金持三若目那なり

筆にする所は天下國家の事で、一身の窮達成敗の如きは、殆んど問題にはして居なかつた。是れ恐らくは、常々箸の上げ下しにも、維新當時に於ける尊王攘夷論の消長、廢藩置縣、開國進取の國是確立、憲法發布、國會開設等、凡て興國的氣分に満たされたる事實談を見聞せしめられつゝあつたが爲であらう。今日の青年は餘りに大人じみて、自個中心主義で、利害の念に強く、萬事が打算的で、ハイカラーで、女性的で、殆んど青年らしい元氣は認められぬと云ふのが、天下なべての評論であつて、決して自分一人の僻説ではない。一代の文豪を以て高く赤旗を掲げつゝある蘇峰氏を引く迄もなく……「翻つて大正時代の青年を見れば、恰も金持三代目の若旦那に異ならぬ。維新の改革は、一面尊皇討幕なりしも、他面に於ては、國家の獨立を必須とするより餘儀なくせられた内政の統一であつた。即ち當時の問題は、國運の隆昌と否とにあらずして、寧ろ一國の

獨立と否とにあつた。然も、今や我が先帝陛下の威徳と、我が先輩の努力と、且つは祖宗の天佑とによりて、帝國の基礎は、猶ほ富嶽の如く動かす可らざるものとなつた。大正の青年は、八方を見廻はすも、未だ嘗て日本帝國の獨立を心配すべく何等の事實を見出さぬ。大正青年の位地や實に安全と云ふべく、安全なるが故に、亦た甚だ呑氣至極と云はねばならぬ。彼等は川柳氏の所謂——賣家と唐様で書く三代目——にて、初代は勤儉にして家を興し、二代之を繼紹し、三代に到りて氣随放埒となり、徒らに淫樂を事とし、遊藝に耽りて家を滅すも尙ほ之を悟らず、但だ漫りに父祖の餘澤に浴するの兒孫、動もすれば先代艱難の事業を閉却し、其の由來する徑路を忘却して、獨り自から恣になり勝ちで、是れ所謂金持若旦那の通弊である。而して誰か我が大正の青年に向つて此の通弊なしと斷言し得るものぞ。大正の日本は一戦して支那に克ち、再戦して

露國に捷ち、三戦して獨逸の極東に於ける堅塞をも陥れ、支那より恐れられ、米國より嫉まれ、獨逸より色目を使はれ、聯合國より出兵を促さる。神武以來帝國の世界に於ける位置、未だ曾て今日の如く偉大なりしとはなかつた。然も我が大正の青年は、之に對して何等心を動かさない。彼等は之を以て尋常一様、當り前の事と思つて居る。彼等は斯る時代に生れたればとて、別段有りがたくも、香しくも感ぜざることには恰も平安朝に於ける藤原家の子弟と擇ぶ所がない。要するに、金持の若旦那たる大正の青年は、過去に創業の苦を嘗めず、現在に經營の勞に服せず、將來に發展の望を繫がず、徒らに取るに任せて取り、成るに任せて成すのみである。即ち唯だ境遇が我を動かす以外には、我より境遇を動かさず、是れ所謂公債が利子を産み、株券が配當を收むるを待つゝの類ではないか。

以上の月旦に對して、大正の青年自身は固より不服であらうが、臭いもの身知らずの諺の如く、靴屋に革の香ひが分らず、肴屋に生臭さを意識されぬ通りに、公平無私の論評は、到底之を他に俵たねばならぬとして見れば、諸君は暫し口を噤んで、一先づ中年先輩の言葉に傾聴せなければならぬ。斯の如く論じ詰めて見ると、大正青年たるもの、眞相や實に憐れむべく、其境遇や寔に氣の毒千萬と謂はざるを得ない。或は曰く、是れ蓋し彼等青年の知る所にあらずして、教育の罪なりと。或は曰く、是れ時勢の然らしむるのみと。夫々相當の理屈のあるべきことならんも、今更責任の歸着點を争ひたればとて、何の役にも立つものにあらず。唯其の事實争ふ可らざることを認むれば足れりである。

惟ふに、明治維新以後、如今日本の世界に於ける位置は、正に成金的であつて、今日の國家社會は、單に情力的無意識的に行動しつゝあるに過

ぎぬ。敵國外患は却つて興國の因になるが、國民思想の墮落は必ず亡國の結果となる。大正の青年が、何等の自信も自覺もなく、恰も根なし草の風のまに／＼水面に漂ふが如く、或は西に或は東に、唯空々寂々、お日様と米の飯は必ず附て廻るもの、牡丹餅は常に棚に在り、戦争すれば必ず勝つものと心得たるお芽出度さは「新らしい」と云ふ假面を被つた危険思想や、猥褻文學が、遠慮もなく青春の生血を吸ひ、元氣を萎やし、愛國心を腐らし、生命の根本をさへ枯らしつゝあるに氣付かず、所謂醉生夢死的泡沫の様な生を營みつゝある有様は、實以て情けなくも亦慨かほしい次第で、苟くも國家の前途を憂ひ、民族の將來を思はんものは、如何にしても沈黙を守ることの出来ぬ場合となつた。

成程「模範青年」の偽善も感服はしない。「成功青年」の拜金熱も褒めた話ではなく、「煩悶青年」の不平病、最多數を占むる「無色青年」のお座なり主義、

固より宜しくないには相違ないが、彼の虚無哲學や刹那主義を以て一切を律するの信条となし、忠君も、愛國も、國家も、社會も、將た世界も、之を自我より見れば、一厘の價なきもの、世の中に寝る程樂はないものを起きて働く馬鹿らしきよ、義は山岳の重きに比し、死は鴻毛の輕きに比すとは唐人の譬言、況んや國家の爲め、社會の爲めと云ふが如き空漠なる抽象概念の幻覺に惑はされて、可惜生命を棒にふるこの莫迦らしきよなど、白晝尙ほ公言して憚らざる「耽溺青年」に至ては、名は日本人でありながら、我が國體の何たるかも辨へず、嘗に我國歴史の事實や、社會組織や、家族制度と相合はざるのみならず、亦實に我日本人として相容れぬので、日本國家の基礎は白蟻の如き彼等に依つて、徐々に喰ひ滅されつゝあるのである。

要するに、現代大正青年の一大病弊は突如として大空より天降りし

天人の如く、將た遽然として大地より涌き出でたる侏儒の如く、何等國家社會と連繋なく、時代其ものと没交渉なる一點で、彼等の存在は、徹頭徹尾、無意識的、個人的乃至斷片的であつて、彼等を一貫し、統合すべき肝心の大信念は何處にも見出すことが出来ぬ。現代國民思想の紛然雜然、四分五裂の慘狀や、道義的觀念の輕跳浮華、何等の權威を有せざる事や、國體觀念の淺薄不徹底なる事や、帝國の世界に負へる天職の自覺せられざる事や、是れ皆惰力自然の運行と、僥倖的天佑のみに依頼して、放縱無爲を事とせる、國家社會全體の責任にして、主として、之が指導啓發の任にある、教育家、宗教家、思想家の罪なりと斷せざるを得ない。

二 大正の青年を救済する者は誰ぞ

大正の時代を繼げ紹ぎ、明治文明を完成すべき當然の主人公として、

責任ある位地に立つべく運命づけられたる大正の青年にして、既に斯の如き憐れむべく且つ危険なる状態に浮沈しつゝありとしたならば、爰に當面喫緊の問題として考究すべきは、如何にして彼等を救済すべきかの一、事より外はあるまい。

然るに此のHow?—如何にして—の問題に完全なる解決を與へんと欲せば、勢ひWhy?—何故に—と云ふ根本的先決問題から研究して掛らざるを得ないが、併し枝末の議論は先づお預りとして、結局煎じ詰めれば、……誨ゆべき筈の青年を適當に誨へ導びかざりしが故に……と言ふより以上の答はあるまい。従つて第一のHow?に對する解答は、自から這裡に暗示せられて居る通り、兎に角彼等をして大正青年の本分に立ち歸り、其天職の神聖なる事乃至彼等と帝國との關係よりして、帝國が世界に負へる使命に對し、其の責任の重且つ大なる事柄を、深刻且

つ痛切に腹のドン底より自覺を起さしめ翻然として個我的虛無思想の悪夢より目覺め、刹那的享樂主義の毒酒の醉を醒まして、吐哺握髮、中宵尚ほ衾を蹴つて起つ概あらしむべく、彼等の裡に一道の靈氣を吹き込むことである。熱血は元來彼等の先天の所得であり、元氣また彼等の專賣特許とする所ではないか。白粉臭き淫猥文學の淡靄や、銅臭紛々たる物質本位の人生哲學の暗雲、一度霽れなば、其當處に天心一輪、真如の月は依然として明皓々、普ねく萬象を照らして居るではないか。

一道の靈氣に依つて彼等の惰眠を覺まし、一滴の注射に依つて彼等を全身不隨より起たしむること、固より直接治療の責任者たる教育家、宗教家、其人の發憤努力に待たねばならぬことは勿論であるが、實を言へば、國家社會の全階級に清新健全なる日本魂的空氣が充ち満ちて來なければ、到底十全なる効果を望む譯には行かぬ。獨り教育家宗教家の

みが如何に發憤し努力したればとて全體の雰圍氣が依然として革まらなかつたならば、恐らく二階から目業程の効能もないであらう。大正の青年をして眞に日本の世界の創建者たる大國民的自覺の眼を開かしめ、其の行くべき當然の針路を誤まらしめざらむ爲には、家庭も學校も、教會も寺院も、軍隊も工場も、社會全體の各機關が、悉く大日本建國の眞意義を體認し、世界に於ける帝國存在の立旨を信得し、政治家も實業家も、筆の人も劔の人も、番頭も小僧も、乃至お三どん子守に至る迄、咸悉く這般興國の大國民精神の炬火に照らされつゝ、各自の本分に向つて躍進するにあらざれば、到底大和民族天來の使命を果すこと能はざるのみならず、單に地理學的に區分せられたる地圖上の一國家としての日本國の現状維持さへ、或は六ヶ敷いかも知れぬ、自覺と言ひ覺醒と云ふは、獨り大正の青年にのみ責むべき事柄ではなく、實は現代に生存し

大日本建

國の精神
は柄とし
て吾人の
頭上に輝
けり

つゝある七千萬の同胞は、男も女も、老人も小供も、一人も残らず覺めて居なくてはならぬのである。大日本建國の理想は、今に始まつた事ではなく、古くは天孫降臨の當初より、明治大正の今日まで、否將來に互つて微塵程の搖ぎも無いのであるが、之を事實の上に體現して行く上から見て、比較的未來に富める大正の青年を當面の責任者たる中心主位に置いたままでに過ぎぬ。

試みに世界の歴史を繙いて見れば、論より證據！古今東西、國家の興亡や民族の盛衰やは、文化の進退や擧げて當時當處に於ける青年者の手の裡に委ねられて居つたではないか。青年こそ實に争ふべからざる Epoch-maker——時代の創造者である。然るに日本全社會の實際が惰氣満々たるの結果、其間に人と成れる大正青年の現状が、斯くも腐敗を極め、墮落に陥り、國家を忘れ、時代に遠かり、家を離れ身を忘るゝ位は愚か、果

青年は時
代の創造
者なり

大正の青年を救済する者は誰ぞ

光榮ある
帝國に生
れ來れる
冥加を思
へ

憂ふる所
小我る所
に踰る所
は憂ふる
に憂ふる
たに憂ふ
りたに憂

ては其の魂さへも打ち棄て、怪ます、只徒らに、蘆生の夢を貪ぼり、石輪玉に映じたる空しき榮華に憬がれ、可惜受け難き人間の生を受け、別して光榮ある大日本帝國の臣民として、這般難有き時代に生れ合せ、無上の冥加をも忘却して、小我の慾望を満足せしむべく、日も惟れ足らざるの慘狀は、實に愍然とも、無情とも譬へがたなき有様で、法華經に所謂……『毒氣深く入つて本心を失へり』……との警告は、正に現代の全國民、就中大正青年の頭上に下されたる慈悲の鐵拳として、難有く押し戴かねばならぬ。直言すれば、凡そ現代人に憂とする所は、決して慾望の追求其ものではなくして、寧ろ其の慾望が小さ過ぎると云ふことである。自我主張の爲めに一切を顧みないのを咎むるよりも、何故にモット大々な自我を押し立てないかを憤慨するのである。現實の生に執著の強いのを強ち責むるよりも、何故に本有——天授の大日本の理想を現實に

寫し來つて、生の意義を一層擴大し、潑刺たらしめないかを悲しむのである。

覺め！大正の青年諸君！諸君は到底覺めねばならぬ。又覺まさすには置かれぬ。何と言つても諸君は時代の主人公である。諸君若し覺めずんば、這個大帝國を奈何にせんや、……と絶叫せざるを得ない。然り而して、諸君をして自覺せしむべく氣運を促進するは、其の責任に直接間接の區別あり、其の感化に強弱厚薄の分界こそあれ、要するに社會全體の協心戮力、内外呼應、共働一致の力に頼らねばならぬのは、既に業に前にも陳べた通りであるが、國民思想の指南車、國民的羊群の牧者たる思想家、宗教家は、衆に率先して、驀直挺身以てこの難關突破の大任に當らねばならぬ。起て！思想家宗教家！覺め！大正の青年諸君！

青年覺め
すんば我
帝國に入
何せんか
如

三 新時代の要求とは

一國の歴史即ち國史なるものは、特殊の國民が過去に貽せる行動の記録であつて、彼の「古きを温ねて新しきを知る」と云へる格言の示す如く、吾人祖先の親しく履み來つた、貴重なる過去の經驗の裡には、依つて以て後世子孫の將來を指導すべき羅針を包藏して居る。従つて悠久なる時代の流れを通じて、自から甲の時代乙の時代と、夫々の特色ある一時期を劃しつゝ、夫々其の時代の要求に應じたる働きを爲し來つたことが解かるのである。即ち時代の異なる、と共に、要求も亦異なる、と云ふことは争はれぬ眞理である。徳川氏封建の時代に在つては、慣例とか格式とかを尊重して、日常生活の基準となし、士農工商の社會的階級の繩張り、は、一步も之を侵すことを許さなかつたから、社會なべての氣風は、

無意義な崇古思想に支配されて居り、毫も新方面に考をめぐらせることも出來ず、馬鹿でも大名は大名、惻怛でも町人は町人で、甘んぜざるを得なかつた。従つて家業職業の世襲は、其の時代至然の要求であつた。殊に當時社會の中堅たりし武士階級の精神修養の權威は、儒教(朱子學派)であつて、彼の「父死して三年其事を改めず」と云ふが如き教訓は、階級制度の維持に對して、大なる力を持つて居つた。又「父母在さば遠く遊ばず」の如き、概して儒教の消極方面の道德を力説奨励し、信仰の方面でも、成るべく丈温和主義、依頼主義の他力淨土門を採用して、所謂民をして頼らしむべく知らしむ可らず」と云ふ、兎角近所に事なかれ主義の政治を理想しつゝ、あつた時代には個人の自由と云ふものは、殆んど見る影もなかつたのである。かゝる時代の教育が、亦偉人天才の發生に不便であつたことは、言ふ迄もない事で、元龜、天正の戰國時代までは、天才唯一の

避難所であり、哺育所であつた僧侶階級でさへも、徳川氏となりては極端なる保護政策の爲に、全く去勢の状態に陥つてしまつた。

斯の如き人為的去勢政策は三百年の泰平を買ふ爲めの代償であり、犠牲であつたとすれば、萬己むを得ない次第であつたのであらう……
けれ共不自然なる壓迫は何時までも續くものではない、多年の間鬱積された熱火は、毛筋程の虚隙でも見付かれは、即時に大爆發を演出すべく、不斷に準備しつゝあつたのである。

時なる哉、蝸牛殻内の小康に昏々たりし惰眠は、端なくも 明治天皇五箇條の御誓文に警覺され、闇々たりし封建制度の頑雲一聲の東天紅に破れて、瞳々たる金光眩ゆく、天晴れ東明の天空に旭日の躍り出でし趣があつた。曰く……

(一) 廣く會議を起し萬機公論に決すべし

(二) 上下心を一にし盛んに經綸を行ふ可し。

(三) 官武一途庶民に至る迄各其の志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す。

(四) 舊來の陋習を破り天地の公道に基く可し。

(五) 智識を世界に求め大ひに皇基を振起す可し。

天來の福音は、如何ばかり壯快に、吾人の父兄たる、明治青年の鼓膜に響いたであらうか。稼業世襲の鐵鎖は斷ち切られた。昨日の足輕も一躍して今日の大臣大將となり、武士の階級のみが事實の上の代表的日本人として自任もし又他からも立てられて居つた既得權が「國民平等」の觸れ出しと同時に日本國民全體に擴げられた。士百姓、素町人と、ナゲナシに取扱はれた彼等の肩身は、俄かに廣くなり、個人の自由個性の發揮各思ふ存分に振舞へよと、畏き邊より公然の御允許ありし上は、人情自

然の流露何條猶豫のあるべきぞ、庶民に至る迄各其の志を遂げしめ、人心をして倦まざらしめよ……森嚴なる其の語其の調、吾人平民の心臓は時ならぬ大浪小波に、押へ切れぬ希望と踊躍を覺へ、起つても居ても居られなくなつた。名譽も財産も、各自の取るが儘である。學問信仰言論の自由、各自の思ひの儘である。要するに「開國進取」の國是に反せず、皇基振起の大目的に背かざる以上は、一切總べて自由たるべしと云ふので、明治新時代の要求は亦悉く此の精神より叫び出されたのであつた。然り而して、所謂開國進取の活模範は、言ふ迄もなく西洋文明諸國で、何人にも映じ易き、燦然たる物質文明の模倣に依つて、着手せられた明治文明建設の大業は、日本帝國をして、一意専心、彼等歐米諸國と對等の地位にまで躍進せしむることに在つたのである。時代の要求は正に此處に存して居つたが、全國民個人の自覺は、極めて朦朧たる有様で、僅かに少

數の國士が、眞に醒めて居つたに過ぎなかつた。併し時代の聲は明かに國民全體の自覺と努力との要求に切であつた。男女を論せず老少を問はず、苟くも日本國民と名乗る以上は、上下一心、官武一途、我が國位をして西洋と肩を比ぶるに至らしむる迄は、努力奮進せねばならぬ。命の續く限りは働かねばならぬ。四十二歳を初老と云ひ、五十歳になれば、跡目を息子に譲り、娘に婚を取つて隠居となるべき社會一般の舊習も打ち破られ、此後は一切隠居を許さずと云ふ隠居全廢論が盛んになり、懷中^{こゝろ}手で遊んで喰ふと云ふ、無職業排斥の聲が高くなり、之と共に勞働精神聖論が勢力を占め來り、かくて封建の遺風陋習は、漸くに影を潜める様になつた。

新たに世界の舞臺に向つて迫出した日本國としては、是れ固より當然の事柄で、自由競争の大海に押し出された潮水には、長なへに休息の

あるべきものではない。然り活動は天地自然の實相であつて、大は日月星辰の運行より、小は顯微鏡的微塵の浮動に至るまで、死んで居るものは一つもない。否、休んだり居眠りして居るものも断じてない。島國的の舊日本人は、或は隱居的左扇的休息を樂と思ひ込み、之を目的として働いたかも知れぬが、一度眼を開いた新日本人には、斯る迷想妄信は有り得へからざる筈である。況んや新日本の青年に於てをやである。彼等の休息は寧ろ更に働かんが爲で、休息が目的ではなく手段である。舊日本青年の働きと、新日本青年の働きと、働きに二つはないが、其性質内容が全然異なつて居る。是れ蓋し時代的要求の異なるが爲であらねばならぬ。於是乎、吾人の慎重に考慮を要するのは、現時代の要求果して如何と云ふ緊急問題である。河向ふの火車でなくて、焦眉の急である。若し這個要求の註文に外れて手に舐し額に汗を流しても、必竟徒爾に終らねば

何にも居せ
られぬ世
の中

ならぬ、骨折り損の草疲れ儲の非難を辭することは出来ぬ。

大正時代の
新要求

成程一面から見れば「活動」の二字は現代人の motto 標語で、活動寫眞の大繁昌を見ても思ひ半ばに過ぐるであらう。併し又他面から察するに、彼等は果して其の「活動」の意義目的、即ち何の爲めにと云ふ確乎たる理想を意識し覺悟して、働いて居るのであらうか、何うかと問を起して見ると、一寸返答に窮せざるを得ないであらう。若し大正の青年にして、眞に時代要求の招きに應へ、勞働神聖の意義理想を體得して居るとすれば、現に社會の各方面に漲ざり溢れつゝある不眞面目——虚偽——輕薄浮華——懶惰等の忌はしき風潮は、毛頭も存在の餘地のなかるべき筈である。然るに悲しい哉、實際上の事實は、無慘にも此の豫望を打ち消し、歴々と其の證據までを曝露して憚らぬではないか。乞ふ、思ひを沈め、耳を穿つて切なる現代要求の叫びを聴け！

四 大正文明の特質如何

明治時代の要求に應じて起つた明治の青年が大なる努力を以て築き上げた明治文明の特質が、前來據べ來つた如く、若き帝國をして世界的大競漕の晴れの舞臺に、彼等歐米先進國と同一線上に、舷々相ひ摩して、名譽あるチャンピオンシップ選手權を争ふことを得る迄に、其の資格を高めむとの一念に、ピッチを速めて、舶來文明の輸入と、西洋式風物の模倣に、維れ日も足らざる有様は、實に鹿を逐ふの獵夫、山谷を辨せざる底のものであつた。従つて、僅々五十年に満たざる短日月の間に、兎にも角にも、捏ち上げたる明治の文明が、皮相的ペンキ塗の間に合せもので、萬事輕便主義たらざるを得なかつた事は、自然の數と言はねばならぬ。今日社會の各方面に、日夜其醜態を露はしつゝある所有缺陷は、必

明治文明
の特色と
其缺陷

竟前時代に於ける輕便主義からの當然の結果で、單り明治青年をのみ責めることは出來ぬ、何人が衝に當つても、恐らくより以上の成果を歛めることが出來なかつたであらう。

大正文明
の二方面

明治時代を繼承して歴史の表面に表はれた大正時代二重の要求は、第一に右の如き明治文明の缺陷に對して起り來る消極的、反省的のものであつて、間口のみ徒らに廣くして薄べらな奥行のない博覽會式文明の缺陷を補足すと云ふよりも、寧ろ或る意味に於ける、文明の改造を行ふ事、第二に物質的方面に於て、管に彼等歐米諸國と肩を並ぶるに至るのみならず、更に新らしき創造に依つて、純日本的文明の特色を發揮し、以て思ひも寄らぬ一點の螢火より、世界的大火となつた歐洲戰亂の悲劇によつて裏書せられたる物質を基礎とせる文明——腕力を主として打ち立てられた國家組織の大缺陷を前車の覆轍とし、茲に世界の

師たるべきの時節到来に目覺め、世界平和の鍵は、即ち藏めて吾人日本國民の手中に在ることを彼等世界に向つて周知せしめねばならぬ。畏くも、今上陛下御即位の聖詔を拜するに……

「皇考、維新の盛運を啓き、開國の宏謨を定め、祖訓を紹述して、不磨の大典を布き、皇國を恢弘して、曠古の偉業を樹つ、聖徳四表に光被し、仁澤邇遐に霑洽す。

朕、今丕績を續ぎ、遺範に遵ひ、内は邦基を固くして、永く磐石の安を圖り、外は國交を敦くして、共に和平の慶に頼らんとす。朕が祖宗に負ふ所極めて重し。祖宗の神靈、照鑑上に在り。朕、夙夜兢業、天職を全ふせんことを期す。

朕は爾臣民の忠誠其の分を守り、勵精其の業に従ひ、以て皇運を扶翼することを知る。庶幾くは、心を同くし力を戮せ、倍々國光を顯揚せん

現代の青年は、大正の意氣を充たせよ

ことを、爾臣民、其れ克く朕が意を躰せよ……

「朕、今丕績を續ぎ、遺範に遵ひ」と仰せられて、何事も皇考明治天皇の遺し給へる御志を紹ぐるのであるとの意味に解し奉ると「大正・維新」と云ふ一般の用語は、穩當でない様に思はれるが、兎に角大正現代に生きつゝあるものは、男女老幼、悉く大正青年の意氣に充たされ、恰も明治の青年が彼の如き旺盛なる元氣を揮つて、維新の大業を完成した通りに、時代の要求に満足を與ふべく、決死的奮闘努力を致さねばならぬと云ふ氣分を以て之を「大正維新」と名けるならば、亦敢て差問はないであらう。唯其の精神を採ればよいのである。

翻つて、之を政治に見んか、堂々たる自稱一等國民は總選舉の神聖投票に際してすら、辻々の交番に「選舉人の心得」十箇條を張り出され……

(一) 選舉に就いて、金錢や品物や、手形などを貰つてはならぬ。

- (二) 公私の地位を得ることに迷はされて、投票や運動をしてはならぬ。
- (三) 選挙に就いて、御馳走や接待を受けてはならぬ。
- (四) 投票所の往復に乗物に乗せて貰ひ、又は車馬賃や、茶代宿料等を出して貰つてはならぬ。
- (五) 選挙に就いて、選挙人は、用水や小作料や、貸借などの利害關係に誘はれてはならぬ。
- 以上の罪を犯すと、一ヶ月以上一年以下の禁錮に處せらるゝか、又は十圓以上百圓以下の罰金を取られる。
- (六) 選挙人を嚇したり拐かしたり、騙したり、其の往來の便を妨げたりしてはならぬ。
- 此の罪を犯すと、二月以上二年以下の禁錮に處せられます。

(七) 候補者の當選を妨げるため、有りもせぬ事柄を言ひ觸らしてはならぬ。

此の罪を犯すと、六月以下の禁錮に處せられます。

(八) 銃器や槍や刀や棍棒のやうな、危険な物を携帯してはならぬ。

此の罪を犯すと二年以下の禁錮に處せられるか、又は五圓以上二百圓以下の罰金を取られる。

(九) 大勢集つたり、鐘太鼓を鳴らしたり、大旗を立てたりして、示威運動をしてはならぬ。

此の罪を犯すと、十五日以上六月以下の禁錮に處せられるか、又は五圓以上百圓以下の罰金を取られる。

此外投票管理者や、開票管理者や、選挙長や、立會人や、選挙監視者に對して亂暴を働いたり、投票所とか開票所とか、選挙會場とかを騒がし

たり、投票や投票函や、其の他關係の書類を毀したり、破つたり、奪つたりすると、犯罪になる。又大勢集まつて、右の様な事をやると、一層重い犯罪になる。

以上の事を實際にやらないでも、之をやる目的で、大勢集つたゞけでも犯罪になる……

用意周到と云はゞ言へ、親切丁寧と言はゞ云へ、いやはや、何ともお耻かしい次第で、苟くも陛下より與へられたる、参政權行使の唯一の場合たる、代議士の選舉に、是れ丈の手數を煩はさねば、世間並の投票さへも出來ぬ様で、立憲政治の、代議制のと、よくも人の前をも憚からず口が利けたものである。想起すれば明治二十三年五月初めて衆議院選舉のあつて以來、總選舉も早や十二回にもなつて、選舉の惡弊の増加すると共に、候補者と選舉人の價値は下落する計りである。政治思想の幼稚なこ

代議政の
實何處に
ありや

とから言ふても、一等國民の資格は到底認める譯には行かぬ。況んや或地方に行はれて居る「鐵か雪駄か」と云ふ隱語の如きは、投票の買賣に對する符諜で、「前金か後金か」の意味であると聞いては、呆と叫んだまゝ、開いた口が塞がらぬ。明治時代は尙ほ恕すべし、御代も大正となり、世紀も二十を數ふる現代に、尙ほ且つ此の弊習を脱し得ず、白晝公然選舉人心得を辻々に曝らされ、而も罰金と禁錮に脅かされつゝ、僅かに参政權を行使し得るが如きは、全く政治的自覺の空虚と訓練缺乏の證據充分である。辻々に張られた選舉心得書一葉は、即ち大正國民の赤耻を街頭に晒らして居るので、舊幕時代日本橋の袂に曳き出して、萬人の嘲笑に供した「晒しもの」も刑罰に異ならぬではないか。

一斑を推して果して全豹を知り得べくんば、之を教育界と言はず、實業界と言はず、太しきは軍人社界に於てすら、文明紳士國家の干城を以

て自任する者にあるまじき非行不正の類々として摘發せらるゝを見るに到つては、實に悲憤慷慨の情に禁えぬのである。

大正の文明は、一切を舉げて、大正國民的自覺と建國的理想實現の積極方針の上に再築せられねばならぬ。是ぞ時代の要求である。明治順風の惰力に依つて、雲上徒らに意氣揚々たる奴風にも比すべき現代の國民は、少しく糸目を縮めて西天の一角に、拳大の怪雲表はれ、將に地上に向つて大暴風雨を捲き起さんとしつゝあるの危険を再思三省せずばなるまい。然し爾の死活は僅かに繫つて一縷の風絲に在るではないか。

五 青年自覺の三要件

脱白して言ふと、明治時代の國民としては、僅に薩長土肥四藩に於ける少數青年の自覺を除いて、他は皆空々漠々、單に外來強國の壓迫に依

て漸く熟睡から目覺めたばかりの所へ眩ろしき科學的物質文明の、金色燦然たる千百燭のアーケ燈をつき付けられたる有様で、それ軍艦よ大砲よ、それ汽車よ電信よと、只譯も理解もなく、子供の祭りに樽天王を昇ぎ出した様に、ワッショ〜と町々を騒ぎ廻つた混雜に紛れて、未だ一般に國民的自覺を起す間もない間に、早やお祭は濟んで仕舞つて、吻と一息、我に返つた有様は實に今日の狀態である。故に「民權自由」と言つても、充分意味を了解して居つた譯でもなく、「開國進取」と聞いても、將た「四民平等」と唱へても決して下全體民より起つた要求ではなく、常に上から與へられ、高きより下された賜物であつたので、唯何となく有り難いとは感じたに相違ないが、また「何故に」と疑問を發して、物がらの善惡を劍別したり、利害の判断を下したりする違がなかつた。

明治五年に新橋から横濱迄の鐵道が、日本臍の緒切つて始めて開通

軍功の上は自覚の
ついでに自覚の
ついでに自覚の
ついでに自覚の

大正の青年と日蓮主義

三六

した時、明治天皇は御詔勅を下し賜ふて、恐察するに餘りある程の御悦びを伸べられた位であつたから、當時一般の市民は更なり、汎く全國民の腦裡に國民的自覺の芽さすべき筈もなく、王政の復古——中央集權政治の復活を手始めとして、憲法の發布、國會の開設に依つて全國統一の政治を布くと共に、全國統一の教育制度を施し、法制に軍事に商工業に、着々として維新の實を行ひ、日清日露の兩役、北清事變乃至青島の攻略に至るまで、陸海共に軍事的の成功は、徒らに半醒國民の虛榮と自負心を助長せしめたる爲に、却つて眞自覺の機運を遲滯せしめたかと思はれる。

蓋し、眞正なる自覺と、痛切なる反省は、平々坦々たる、長安の大道を漫步する様な境涯では、到底起り得ないものであつて、是には何か強烈なる内部的煩悶とか、乃至は非常事件の突發による外部的刺戟とか、兎に

歐洲大戦
に於ける
國民的自覺
の促進

角平常に異なつた境遇に逢着して、茲に始めて驚異の眼を打開し、自覺の閃光が胸臆を照らすに至るのである。塞國の一青年に依つて投げられたる一塊の爆彈は、端なくも歐州全土に焚へ擴がり、我邦も亦其飛火を受け、聯合國の一味方として、獨逸軍と馬上相ひ見へざるを得ざるの運となり、輓近中華民國も亦獨乙に對して國交斷絶を宣し、露國の大革命はザ一の退位に次で皇儲の薨去を傳へ、米國亦獨に對して宣戰すべき模様ありと風評せられ、此後時局の發展は果して如何に成り行くであらうか豫じめ測り知ることの出來ぬ状態となり、斯くて交戰國に對する海外貿易上の關係より「國產獎勵」の叫び倍々高く、南洋諸島に對する「輸出増加」の趨勢彌々盛大となり、加ふるに隣國露西亞よりの軍需品の注文は我が産業組織の規模の小弱なるに氣付かしめたるの結果は、遲延ながら、各種工業會社の増資となり、規模の擴張となり、染料製薬

に關する、新會社工場の設立となり、理化學研究所の創立となり、是迄自から悔り自から屈し、自から卑しうし居りし實業の日本は、爰に先づ國民的の自覺を起し、其の大勢の及ぶ所、政治に教育に、將た學術宗教に、漸く國民的自覺の本氣に復活すべき觀を呈して來た。是れ蓋し這回の大戦によつて透導せられた甚大なる賜物として感謝せねばならぬ點で、要するに大正現代の青年は、男女貴賤の別なく、咸とく皆内的自發的に自覺すべき約束の下に生存して居るのであると、堅く覺悟をきめねばならぬ。即ち大正の青年たるべきものは……

(第一)としては、須らく先づ國家に於ける個人の價值如何の問題に自覺せねばならぬ。

現下日本國民としての第一の遺憾は、世界の特等國民として、世界唯一の神聖なる國家を擁護し、以て帝國の對世界存在の立意を實現すべ

天下第一品
と日本國
と天下第一
品の日本

き、神聖なる天職を有する國民なりとの信念が徹底して居ないこと、否寧ろ斯る信念の皆無なることである。世界人類の一員としての個人の權利や資格が解つても、國家を離れた個人に何程の値があらうぞ、全體日本人の缺點は泰山の如くドッシリと沈着のない事、大洋の様に清濁併せ呑む底の襟度の乏しい事、只イライとアセつて、天空を望むが如き遠大の志操に缺くる事等で、要するに、天下第一品の尊貴なる國家と共に生死を同じすべき、天下第一品の尊貴なる個人の價値を認めない爲に、政黨員としては黨利追求に目眩みて、國家國民の利害は不關焉の態度となり、實業家としては、僅に拾萬や二十萬位の黄白を以て小成に安んじ、女優と別荘と自働車の外、何等高尙なる趣味嗜好を有せざるが如き、教育家宗教家其他現社會の各階級に屬する個人が、概して、眼前の小利小康、小名譽に甘んじて、人格の尊嚴を意識せず、従つて他の人格を尊重

するの念慮も薄く、之が爲めに元來人格の眞價を認識し、且つ發揮せしめん事を理想して唱導せられたる個人主義も、あはれ順當の發育を遂ぐるに能はずして、利己主義の權道に陥り、自利の前には、他人は固より、友人も家族も乃至國家さへも、之を犠牲とするも敢て憚らざるの極端に走り、我慾我見の熾んなること、現代の如きは、蓋し稀有であらうと評せらるゝに至つた。大正の青年たる者は、先づ以て國家に於ける自己人格の價値を覺り、國家格の尊嚴は國民各自の人格向上を外にして望むべからざる二者相依の關係を自得し、廣く修め深く養ひ、須らく先づ自己人格の向上を志さねばなるまい。

爰に謂ふ人格とは、勿論男子のみに限らないのであつて、社會學者「ムナー」博士等の説明を待つ迄もなく、國家組織の要素たる家庭は、男女兩姓、二位一體の上に成立するので、女子を侮ることは、轉て男子自から

を侮ることとなり、俱に共に、人格の向上進歩を期圖することは出来な
い。次に……

(第二)大正の青年をして、平時公共の團體に對する德義的生活に馴れしむる事。

大聖アリス・テレースに聞くまでもなく、人は元來社會的動物であつて、此世に産れ落ちるそもくから、他人の中に他人の世話になつて成人するのである。況んや今日の如き社會制度に於ては、孰れかの國家に籍を有せずしては、何等個人として存在の意義を爲さぬが如く、男女各個人が、夫々家を造つて、國民たり人間たるの本務を完ふするには、何等か自營自活の職業に就かねばならぬ筈で、無職の遊民は、斷じて現代に存在の餘地なき筈のものなることは、前にも陳べた通りである。従つて酒屋は酒屋、餅屋は餅屋、官吏は官吏、商人は商人と、夫々種に依り類に

随つて特殊の團體を形造り、使ふもの使はれる者、雇ふ人雇はれる人の別はあるが、互ひに相寄り相助けて、直屬團體の幸福利益の爲に、苦樂を共にしつゝ、國家共同の大目的を達し行く様、忠節を盡し、臣子の本分を果す様訓練せねばならぬ。然るに現今の状態を通覽すれば、一旦緩急に臨んでは驚くばかり鞏固なる團結力を顯はし、所謂舉國一致の實蹟を擧げ得たことは、一再に止まらなかつたけれ共、平素に於ける各個人の行爲を見れば、全然戰時とは別で、沒我的精神は、何處へやら形を潜めて、我利的根性は極端まで發揮せられ、國家の利害は愚か、所屬團體の損徳も、友人の名譽も、親兄妹の親しみも、道徳も、宗教も、學問も、何等の權威なく、猜疑嫉妬等の惡徳のみが跳梁跋扈を極め、太しきに至つては、二世を誓つた夫婦の間ですら、金錢の爲め利益の爲めには、互に相欺き、同僚親友の間柄にも、口には蜜の如き甘言を弄そびつゝ、肚には恐ろしき利劍

の刃を磨くが如き、實に言語道斷の舉動と言はねばならぬ。

内地はまだしも、海外に於ける、邦人間の利益の爭奪の真相を見よ、互に他を排し人を讒して、以て自から得たりと思へる精神の卑劣さは、到底鼻持のならぬ有様である。支那に於ける日貨排斥、米國に於ける排日問題の、今尙ほ依然として氷解せず、嘗に國光を外國に向つて殺ぐのみならず、種々不利益なる外交問題をさへ惹起するのである。其の主因は即ち邦人の共同生活に對する自覺の缺乏と、其の訓練の皆無なるとの爲である。

其他政治に冷淡なること、彼の英米に於ける婦人參政權論者をして驚死せしむるに足るべく、實業上の信用の遙かに支那人の下風に在りと云へるが如き、生蕃人にも劣る様な各方面に於ける無自覺的證左は、擧げ切れぬ程である。大正の青年たらん者は、深く此に注意して、平素に

於て協同一致の修練を積むべく心掛けねばならぬ。更に……

(第三)に大正の青年の眞自覺に訴へざるを得ざるは、世界に對する大

日本帝國の天職如何と云ふ重大問題であら。

幕府政治の末期、浦賀埠頭一發の砲聲に、始めて熟眠より目醒めたる日本は、只管外來勢力の威勢に氣を奪はれ、俄然雲上より天降りしか、乃至は大海の底より浮み出でしかと怪まれし、彼の黒船に依て代表せられた、歐米列國の實力を過大視し、従つて「尊皇攘夷」の觸れ出しは立派なりしも、所謂外灘慶の上、邊だけは強さうに見へたが、腹の中は却つてビク／＼もので、萬一彼等の御機嫌でも損じたならば、或は帝國の獨立をも危殆に陥らしめぬとも限らぬと、戦々競々、恰も薄氷を履むの感に充たされたであらう。彼等の強且つ大なるに思ひ合せて、我は如何にも小さく且つ、弱さうに感せられたに相違ない。世界の地圖を擴げて、辛ふじ

世界的眼
を以て
日本を觀
るに
如く
や

て亞細亞の片隅に、粟粒を散らした様な島國を見付けたとき、我國の如何にもミソばらしいのに愛想がつかたかもしれない。併し是までお山の大将己れ一人然と、日本的日本で小さく満足して居つた我國は、斯くて世界に對して、日本の存在を外的に發見し氣が付いたので、明治維新の覺醒運動は是から捲き起されたのであつた。是迄は唯島國的、草の隨的、眼光で世界を眺めて居ただけで、未だ世界的の眼光を以て、自己を觀た覺へが無かつた——幾分か有つたかも知れぬが、餘り此方面には慣らされて居なかつた。歴史あつて以來、朝鮮に學び、支那に習ひ、印度に教へられ、歐米を師とし、常に他國民苦辛の手に成つた「輸入文明」の恩澤に馴らされた、純他力主義、模倣主義の甘い味を占たのが遂に第二の天性となつて、未だ曾て世界の教師となつて、彼等外國に教を垂れたことがない。大戦争前迄の海外貿易表が、常に入超を示して居つた様に、哲學宗教

常に他人の
未だ人の
師たる人の
新なる人の
日本なき

百科の學を始めとして、政治に、法律に、軍備に、乃至衣食住の末に至るまで、恐らく外國の御厄介にならぬものは一つもないであらう。未だ曾て彼等外國の文化に貢献し、彼等の日常生活に利便を興へたと言ふ程の新發明新發見は、何うも日本には見當らぬ様である。在つて見當らぬのではなく、無くて見當らぬのであれば、是れ蓋し當然の事で如何とも詮方はない。日本人は唯だ徒らに猿真似に長じて、竟に獨創的能力なき人種なりとさへ見切りをつけた學者もすくなくない。是れ果して妥當の見解であらうか。何にか外に深き仔細が潜んで居るのではなからうか。普通平凡の腦力では、到底判斷の出来ない問題で、日蓮主義の高等批評のみ、獨り能く之が解決を興へ得る許りである。

「舶來」は上等の換へ語「和製」は下等の符牒と心得て、敢て耻辱とも外聞とも思はなかつた大正以前の人間に、如何して大日本帝國の對世界的

日本は果
して獨立
國と公稱
され得へ

存立の意義なぞが解らう道理がない。獨乙との國交斷絶は即ち思想學問の種切となり、染料繪の具藥品の拂底となり、食品の杜絶となり、吾々丈夫な者の空腹位は我慢も出来るが、半死の病人や、重傷患者が、天を仰いで藥物の不足を啣ち、東西をも辨せぬ無邪氣な子供にまで、玩具なしで遊ぶべく強ゐねばならぬと云ふ慘狀は、何たる腑甲斐のない有様であらう。況んや、鐵道の延長も、工場の増築も、軍備も、戦争も、——有利事業經營の爲めに低利な外國の遊金を借るのは別として、外資に頼らずしては、一切何事にも手が出せぬと言ふ様な、憐れな經濟狀態で、果して一個の獨立國と唱へ、文明國と自慢し、一等國民と意張り、東洋平和の保障者、世界文化の貢獻者だなどと、口幅つたい事が言はれた義理であらうか。二度も三度も内閣が代はり、議會の解散を行はねば、高が二個師團位の増設も六ヶ敷い様では、到底大國民大日本帝國の自覺などは、百年

河清を待つが如きものかも知れぬ。さりとは餘りに情けないではないか。嗚呼。大正の青年覺めずんば我が大帝國を奈何せん。日蓮主義の活火に依つて彼等の内的精神的大革命の火の手を揚げ、一切の小我、小慾、小妄想を焼き盡して、當處に大我、大慾、大理想本來の面目に蘇生せしめ、爰に始めて大日本帝國の世界的使命も解り、臣民各自の帝國に負へる、先天的本務の意義も納得せられるのである。

斯くて、日蓮主義の靈的洗禮に依て、眞眼を開き、肚の底より大日本帝國の深義、並に帝國に於ける自己人格尊嚴の極意が識得せられ、信得せられた上で、自然と社會國家に對する外部的事功の上に自覺の結果を顯はし來らねばならぬ。國運の伸張と云ふも國威の發揚と言ふも、國力の充實と云ふも、必竟這個人格の根本から培かはれた「自發活動」の結果に待つより外はない。

日本ならば世界
の師とせらるる
能はざること
事は唯一

之を自得せしむる
もは日蓮主義の
主義のみ

國民的個人々々の眞自覺と、國家社會將來の運命との關係の、斯の如く緊密且微妙なることが明瞭になつたならば、必然の結果として、現代救濟の第一着手は、先づ以て大正青年の根本的自覺を喚起すべく、日蓮主義の警鐘を鳴らし、妙法五字の旗印を押し樹て、國民精神の統一振作に向つて、突進するの一事に歸着する事も心底から會得せられるであらう。

六 大正青年の信的覺醒

數へ來れば、大正青年の手に待たねばならぬものは、實に十指を屈するに遑なき程であらう。憲法政治を布かれてより既に三十年、而も尙ほ、憲政擁護の叫びが所在に絶えぬ様では、到底歐米に向つて、法治國の看板を振り廻はす譯には行かぬ。就學兒童のパーセントが、假令九分九

形式に陥
れる明治
教育の被

眞の教育
は日本魂
に日本人
格得者の
なり感化

大正の青年と日蓮主義

五〇

厘に上つても、中學を卒業して暑い寒いの消息文さへ人並には書けず。大學生の大半は、近眼か肺結核か、神経衰弱の半病人か、否らざれば意氣銷沈、精力衰退の若老人で、物の役に立つべく見ゆるものは、曉天の星も管ならず、後方から詰め込まれるがら自然に押され出る仕組の太心式教育制度で、大人物の輩出する筈もなく、多くは生きた機械と選ぶ所なきのみならず、さしたる腕前もなきに給料の廉きを啣ち、寸功もないのに、其地位の低きを恨むだけが、本物の機械よりは始末がわるいと云ふ有様。是れで何うして國家の將來に安心がなるであらうか。教育の普及とは徒らに村債を起して校舎を改築したり、標本や掛圖の揃つて居ることを言ふのではなく、寧ろ校門は傾き、黑板は剥けて居つても、眞に大國民的精神を體得したる教師が、大日本建國當初よりの國是たる六合照臨、開國進取の大方針の下に、何物をも犠牲として惜まざる純忠孝的

國民を養成するのが本統の教育である事に、近頃漸くお氣が付かれた様な、腐甲斐ない教育界の實情を見ては、大正の青年たるもの、果して雲煙過眼と、落ち着き拂つて居られるであらうか。

眼を轉じて實業界を見渡しても、亦何處も同じ秋の夕暮で、歐洲戰亂の餘響として、思ひもかけぬ財海の順潮に漕ぎ出したる海外貿易の盛況に、成金黨萬歳の響聲の下より、兪製濫造の叫びは鼎の沸くが如くに起りつゝあるではないか。其他軍人社會の賣國的行爲と云ひ、暴慢貪汚の舉動と云ひ、浮華文弱の傾向と云ひ、心ある者をして、陛下の股肱、國家の干城とは果して斯の如き淺間しきものなるかと、覺へず天を仰いで長大息を禁せざらしむるが如き、官吏社會の風紀の弛緩せる、政黨者流の黨利に汲々たる、宗教社界に於ける迷信俗信の横行より、末は新しき女の家庭破壊、風俗壞亂に至るまで、なべて明治維新以來順境の潮に

全社會を
通じて國
民的大信
念の培養
を忘る

物の成るや必ず成るべきの途を踏んで成つたのである。試みに之を幕末明治過渡期の史實に見るに、彼の王政復古と云ひ、開國進取と唱へ、尊皇攘夷、勤王討閥と論じつゝ、兎にも角にも明治維新の幕を開き、國運をして今日あらしめたる所以のもの、主として上に千歳一出允文允武なる明治天皇の御稜威嚇灼たるあり、下には少數とは云へ、波理提督浦賀灣頭一聲の青天霹靂に端なくも彼等明治青年の惰眠を驚破し、對外的眞自覺の眼を打開して國家獨立の前途、岌々乎として累卵の危急よりも急なるに氣付きたるの結果、固有の日本魂は勃然として頭を擡げ、忠君愛國の情熱は滿身に迸し、内政權奉還、廢藩置縣等、内政上の改革着々緒に就き、外、歐米に對する國際條約の締結、留學生の派遣、物質文明の輸入等、内外の施設、緩急宜しきを得て、明治年間五十年の文明を築き上げたる明治青年——忠臣輔弼の功と言はねばならぬ。従つて、自餘大

對外的國家獨立の自覺と文明の治

多數の國民は、半睡半醒の眼瞼を擡りつゝ、牛に曳かれて善光寺參りをなせしに過ぎぬ。指を屈すれば、松蔭、景岳、三條、岩倉、木戸、大久保、西郷乃至伊藤、井上、大隈等少數者の覺醒に外ならざりしさへ、爾く多大なる効果を齎せし最近の事實は、如何の印象を大正の青年の眼底に映せしめつゝあるであらう？

思ふに個人主義的思想は、實に近代思想中の主潮であり、信條であつて、三百年來、四民階級の鐵鎖に離隔せられたる人爲的障壁は、彼の佛蘭革命によつて頓に火の手を揚げたる、民權自由の思潮に依つて見事に一掃せられ、勢の趨く所、到る所に狂瀾を捲き怒濤を昂げた。五ヶ條の御誓文に依て保證せられたる、四民平等、上下一心、輿論尊重、自由競争、開國進取の大福音に復活して、權利義務の觀念俄かに發達し、個性尊重の思想は、限なく行はれ、人智は増し、生活は便利になつた。而も曾て日本國民

個人主義的思想に誤らぬ大正の青年

の代表階級たる武士に依て、涵養せられ維持せられたりし國民道德の權威は、四民平等に國民たる資格の擴大せられしと共に頗る稀薄になつたのみならず、全く其根底を失つてしまつた。斯くて數千年來國民性養成の搖籃であつた、我が固有の家族制度、結婚制度さへ滔々たる個人主義的、民本的、物質的、風潮に洗はれ、頗る危険なる状態となつた。大正青年、共通の病、毒たる、煩悶と耽溺とは、蓋し主として、新舊思想衝突の焦點に立つて、然るべき調和統一を現出することの出来なかつた結果に歸せざるを得ない。小心臆病なるは退いて煩悶青年となり、大膽横着なるは進んで耽溺青年となり、横着ともつかず臆病ともつかざる徒輩は、所謂無色青年として、波のまにまに、浮萍の生を送つて居るのである。初め外國の威壓に餘儀なくせられて、外的不自然的に醒めたる少數者の自覺より樂き成されたる明治時代は、まだしも、大正も早や六歳を數ふる今

國家興亡の鍵は青年の手中に在る

日となつて、尙ほ且つ斯の如き青年の有様では、到底安心して國事を委ねる譯には行かぬ。——とは言へ、次代の帝國を承けつぐべきは、即ち大正の青年を外にして他に其人なき以上、早晩國家の全局面を擧げて、彼等の双肩に打ち委せざるを得ない。怒るにも怒られず、泣くにも泣かれずとは、蓋し此の場合に於ける心理状態を道破したものであらう。

七 大正青年修養の標的

自分は慶應義塾の出身であるが、曾て在塾當時福澤先生のお話の一節に、明治初年の頃、或日の事、鎌倉へ遊びに來られて彼方此方と散歩して居られた處が、此の近所の百姓でもあらうか、頬冠りをして、今で言へばバナマの帽子でも冠るのだが、其の時分だから手拭を頬冠りにして居る、此の手拭と云ふものは大變便利なもので、熱い時には帽子の代

福澤先生と百姓との問答

りとなつて結構暑さを除ける。雨が降れば頭に冠つて傘の代りとなり、夫から帯のない時は帯の代りになる。喧嘩をする時は向ふ鉢巻になり、鼻が出ればハンカチーフの代りになり、物を洗つた時には手拭の本職を發揮して手を拭ふ、物を貰つて包む時には風呂敷の代りになる。寒い時には襟巻、下へさがつては腰巻の代理までも勤めると云ふ誠に調法なもので手拭の十徳とは此事である。是れが調法と云ふことは私が云ふのでない、西洋人が日本に来て一番譽める物は手拭で、大變調法な物だと云つて大層賞美するが、是れ或は日本が世界に向つて誇るべき發明品の中の一つであるかも知れぬ。あの手拭を斯う横町に冠つて、鼻唄をうたひながら「シャン／＼」とやつて来る。箱根八里は馬でも越すが……か何かであつたらうと思ふ。何しろ明治初年であつて彼の有名な五箇條の御誓文に依つて明治の時代が進んで行くべき方針も極つ

て、所謂「開國進取」——舊來の陋習を破つて、世界の各國から廣く智識を求めて、其の短を捨て、長を取り、進んで行かうと云ふ御誓文に基いて、開國進取の國是が定まつた。随つて從來幕府の制度として、四民の階級——士農工商と云ふやうな嚴重な階級があつて、恰かも印度の昔に於ける四姓（じじ）の如きものがあつて、先天的に日本國民の區別が四種に分れて居つたと云ふ様な工合で、三百年間の因習に依つて固く我が國民の間に四姓區別の印象が這入つて居つた。處が唯今申すやうに維新の國是に依つて、四民は皆平等である、士農工商と云ふやうな區別が本來あるべきものでない、明治の國民は皆な悉く平等である、「四民平等」と云ふことが熾んに叫ばれる様になつた。其處で福澤先生は素より明治維新の先覺者であり、自由民權の鼓吹者で一般の者よりも考へが進んで居たに違いない。見ると向ふから一人の百姓が愉快さうに「シャン／＼」と

馬に乗つてやつて来る。如何にも愉快さうである。四民平等と云ふ布令が出て、百姓も今日は公然と鎌倉街道を誰れ憚からず馬に跨がつて、シヤン／＼やつて来る。ア、實に愉快である。此の意氣で日本が進めば、必ずや日本は西洋に劣らぬ國になるに相違ない。一つ譽めてやらうと云ふので、先生が喜んでやつて來られた。處が遙かの先きで其の百姓が先生を見附けて、向ふに來るのは侍だ。未だチョン鬚を結つて兩刀をたばさんで、五ツ紋の羽織で來るから侍に違ひない。段々近づくとは是れはいよ／＼お武家さまだと云ふので、百姓が泡を食つて馬から下りて、例の手拭のシルクハットを取つて、土下座をついて、ヘーッ……とやつて居る。處が驚いたのは返つて先生で、其の愉快さうにやつて來るのを非常に喜んで之を迎へられたのに、案外千萬の舉動に反動の火がついたから堪らん。先生はズカ／＼と進んで來て、コラ貴様なんだ。ヘーッ、誠に相

濟みません。測らずもお侍様の眞似を致しまして誠に恐れ入りましたと本統に恐れ入つて居る。其處で先生は先づ立てと云ふので立たせて置いて、扱今日は最早や昔とは違つて、四民平等——四民の階級はない世の中である。貴様が馬に乗つて愉快さうに鼻唄で來るのを、拙者は大いに喜んで、是れは日本も進んだものだ。是れならもう日本も大丈夫と思つてやつて來たのに、矢張り貴様は「舊來の陋習」が頭から去らんと見えて、行きなり馬から飛下りるとは情けない。そんなことでは、是からの大日本が西洋諸國に對して遜色なく、肩を並べて進んで行くと云ふことは出來ない、そんなことぢやいかんと云つて叱り散らし、さあ早く馬に乗つて行けと云つて、強制執行的に馬に乗せて、通してやつたと云ふお話があつた。

斯の如きは僅か一片の逸話に過ぎないが、是で以て明治初年の状態

がほゞ想像されると思ふ。即ち明治の文明と云ふものは、決して此の國民全體が一同に士も百姓も商人も大工も左官も是等一切の階級が大日本國民と云ふ自覺に立ち、一切西洋の事情を呑込んで、斯う云ふことではないかと云ふので、開國進取の國是が國民の内部から發生して、此の五十年の文明を生んだのではない。僅かに海外の事情を覗き見た處の所謂少數の先覺者が社會の先きに立つて、或は開國進取と云ひ、或は四民平等と稱し、或は自由である權利である義務であると云ふやうなことで、或は國民を反省せしめ、或は國民を鞭撻し、或は建白し、或は演説して、多數國民が少數先覺者に引かれて漸く明治の文明が築き上げられたものである。

吾々は明治の文明に對して決して不平を抱き、不足を云ふ者ではないが、元來自分も明治生れで、明治に育つた明治ッ兒である。此の間天晴

會と云ふ日蓮主義者の會合で會員の交名會があつて、各會員が各々其の出生地、現在住所、姓名、年齢、職業、學校及び其の信する處の宗教と云ふ順序で七八箇條の條件をば、自分自から紹介すると云ふとをやつたりしますが、其の時一番の年長者が七十二歳と云ふので、是れは天保時代の生れ、夫れから若いのが當年十五歳になる少年で、十五歳から七十二歳迄の間に色々の年齢があつたが大部分は明治生れ、明治ッ兒で中々幅が利く譯である。其の明治の文明と云ふものが麗はしく響けば我らは肩が廣くなる、肩の中を廣くして大道を歩行くことが出来る。其の文明の明治も四十五年で一段落を附けて、時代は「大正」と云ふことに代つた。其の時自分は非常に悲しく感じた。「明治」と云ふものは果して何處に往くのであらう……かど、恰かも活きた人間が歸らぬ旅へ赴くのを送くるやうに「明治」を見送り、言はゞ「明治」と一緒に心中でもしたかのやう

に思はれたのである。

斯く言ふ中に明治は遂に去つて大正となつたが、扱て振り歸つて明治の時代を考へて見るに、先づ第一に自分の胸に浮ぶのは、全體明治の文明は如何にして築き上げたのであらうかと云ふ事で、是は明かに極めて少數なる先覺者が大多數の國民を指導し鞭撻して漸く出來たものであつて、大多數の國民は何だか一向譯が分からず、五里霧中で恰かも霞を通して花を観ると云ふやうで、判然とは分からないが、お上で此方とへ仰しやるから兎に角往かねばなるまいと云ふやうな調子で、唯として服従して參つた所が、幸にして維新先覺者の觀る處が案外國に國つて、自から世界の氣勢に合致する様になり、明治の時代と、殆騎虎の勢で進みに進んだ四十五年間の文明は、我が日本をして正に世界の一等國たらざるべからずとの大自覺に達する迄の基礎を創造せしめ

第二の維新は如何なる云ふか

たので洵に結構な御代として、お互ひ共に喜ばねばならぬ。今言ふやうに明治文明の根柢が、我々國民全體の自覺の上になつたものでない。爲めに色々缺點が露はれて來たのである。無いものは表はれる筈がない。缺點がある證據には近頃彼方彼方で「第二の維新」とか「大正維新」とか云ふ聲が大分高まつて來たではないか。是れ則ち國民の心の内面から叫び出された眞面目なる聲で、今日以後の日本は單に上流社會に限らず中流も下流も、言はゞ日本國民と云ふ全體の流れが、僅かに名義上の一等國位で満足することなく、更に進んで世界の特等國となつて範を世界に垂れねばならぬと云ふ大抱負、大決心を以て進んで行かなければならぬ。唯々少數者に委ねて、宜しく願ひますと云ふ、舊來の陋習は疾く打ち破られた筈である。然るに封建制度に依つて長い間馴らされ來つた日本一般の思想界の主潮は、儒教主義であつて、其の教科書は何

教權的信仰
は覆滅
せられん
ぞす

であるかと云ふと「子程子曰大學孔子之遺書而初學入德之門也」と上から下へと読み下して、仁義禮智信の人倫五常を説き聞かして、或は親の權威を説き、或は君の威光を説き、要するに上なる者は下に向つて命令すべき實力と權威とを備へて居り、下なる者は唯上に向つて絶対に服従すべきものと云ふ、教權的信仰に養はれ來たのである。萬事萬端御無理御尤さまの一天張り、下の者はさう云ふ運命を持つて生れ落ちたものであると教へ込まれ、泣く兒と地頭には勝てぬもの、是は少々無理である否大ひに非道であると思つても、どうせお上のお仰しやることだから宜しくお願ひ致します……と云ふ風で濟んで來たものである。所が明治の御代となり西洋の文明に倣ひ屑よく舊來の陋習を破つて知識を世界に求めよと云ふことで、歐米の文物がドン／＼と這入つて來る。隣の物は香ばしいものと頭から信仰して掛つた眼には、善惡の

西洋崇拝
の餘弊に
國民的卑
屈心を養
成せり

判別はつかない。舶來と上等とは同一の概念、少くとも同じ價値の概念と見做され、どんな物でも舶來の二字が付かなければ通用しないと云ふ勢ひ、學問でも宗教でも其の通り、日本に立派な教へがあつても、唯々日本の物と製では……と云つて仕舞ふ。殊に佛教は三千年來のものである、舊幕時代には古い物に價値があつて、骨董と同様で新らしくてはいかん。夫れで新らしい物でも成るだけ古い色を着け、塵埃や垢で時代を附けて、喜んで居つた。系圖や門閥を尊ぶと云ふ風習も之から來て居つたので、凡て斯う云ふ風潮が國民全體の頭を支配して居つたのである。明治維新の曙光は先づ此の關を打ち破つた。

上げ潮の如くに滔々と流れ込んで來るものは、汽車や電信ばかりではない、彼國の學問や文學や美術も這入つて來る、又品物を通じて彼方の風俗や習慣も這入つて來る。いろ／＼な思想も附隨して來る。一旦道

を明けた以上は急に防ぎ止める譯には行かぬ。西洋の言葉、文字、品物だ
 けに接して、其の思想には觸れないと云ふ譯には行かぬ。權利とか義務
 とか人格とか自由とか、之を口にしないものは人間でない様な勢で、大
 正時代に至つては、何等の理由もなくして徒らに服従するが如きは奴
 隸的道德に過ぎないと云ふ法律思想や、個人主義、自然主義、實利主義、様
 々な考が巴、滿字と入り亂れつゝ、國民思想界は大混雜の有様となつた。
 舊信仰舊道德の權威が全くすたれてしまつた結果、人心の傾きは恐ろ
 しく批評的、懷疑的に流れて、どんな善い物でも始めから其の儘には受
 入れない。一旦は之を疑つて見なければ承知が出来ぬと云ふやうなこ
 とになつて來た。是迄の上から下への漢文とは異つて、左から右へと讀
 む横文字で練り直された爲に頭を横に振ると云ふのは、是はごうも自
 然の結果である。

懷疑思想
の流行

明治天皇
の御廟
の國民
の反省
の促進
の天意
の注意

斯う云ふやうな次第で、有形無形ともに只新を追ひ奇を求めつゝ上
 へつて來たが、明治天皇の御大喪と共に大正の新時代を迎へ、多事多端
 の明治五十年の長き間を通じて、兎にも角にも明治時代の國民思想を
 繋いで居つた中心の大黒柱を失つたのであるから、人心茲に大に覺め
 ざるを得ない。日頃の浮氣を反省して、眞の自己に立ち還らねばならぬ
 羽目となつた。是迄餘り氣を止めなかつた法華經「壽置品」の有り難味が
 シミと胸に答へて來た。お互の精神上に一大煩悶の起つた時、國家
 浮沈の大問題がヒシヒと迫つて來ると云ふ様な一大危機に之を救
 濟し之を解決せしむべく、一切衆生最後の頼みとすべき御經文が、茲に
 ちやんと我々に活ける教へを垂れつゝある。否、三千年昔の本佛釋尊は、
 今も尚ほ微妙の音聲を以て、不斷に説法し給ひつゝあることに氣がつ
 いた。お經文には……「若し佛様が年中何時でも御座ると云ふと、人間と

云ふものは淺墓なもので、所謂憍慢になる、懈怠と云つて怠けてくる。其處で佛様は眞に滅するのではないが、假に姿を隠して一切衆生を驚覺せしめ、眼を醒させると云ふ己むなき必要があるから、佛様の大悲心から、一時姿をお隠しになる……斯う云ふ意味の教がある。

考へて見ると日本も漸々の事で世界の一等國の仲間に入入りかけ、二十七八年の戦争を経、更に三十七八年の後に於ては、もう一段高く日本の國光を海外に輝やかして、遂に世界の一等國に(名義だけでも)列する。云ふ所まで漕ぎ付け、近く青島の攻略に首尾よく勝利を遂げて、ヤレ嬉れしやモウ大丈夫と安心の腰を卸してしまつた。強敵獨乙を亡ぼして仕舞つた様に安心して憍慢となり、憍慢は遂に奢侈となり、虚榮となつてしまつた。吾々は茲で止つてはならぬ。更に深く修養し大に發展しなければならぬ。聖日蓮の理想を實現するには、何うしても日蓮主義

吾人は更に修養を深くせよ
吾人は更に修養を深くせよ
吾人は更に修養を深くせよ

の信念を腹の底に堅めて之より生ずる非常なる決心と、非常なる堅忍持久の力を揮はなければ、日本國としての存在は固より世界に對する日本の大天職は永久に實現することなくして滅亡の運命を甘受せねばならぬ。三十七八年役位の成功を以て強露を膺懲し得たりと思ひ、青島の一戦を以て強獨何のそのと云ふ様な憍慢心を起して、是で世界一等國であるの、天下無敵であるのと早呑込をしたなれば、我國はそれきりで滅亡である。

聖日蓮の自叙傳とも云ふべき「種々御振舞抄」の中に……

『去ぬる文永八年九月十二日、御勘氣を蒙むる。其の時の御勘氣の様も常ならず法に過ぎて見ゆ。了行が謀叛を起し、大夫律師が世を亂さん。とせしを、召取られしにも過ぎたり。平の左衛門尉を大將として、數百人の兵者、胴丸着せて、えぼうしかけ、眼を瞋し、聲をあらゝかにす。大體

事の心を案ずるに、大政入道の臣ながら世を取り國を破らんとせしにも似たり。只事とも見えず。日蓮是れを見て思ふ様、日來月來思ひ儲けたりつる事はれなり。幸ひなる哉、法華經の爲に身を捨ん事よ。臭き頭を刎られたらば、沙に金を替へ、石に玉をあきなへるが如し。さて平の左衛門の尉が一の郎従少輔房と申す者、走り寄りて、日蓮の懐中せる、法華經の第五の巻を取り出して、おもてを三度責み、散々に打ちちらす。又九卷の法華經を兵共打散して、或は足にふみ、或は身に纏ひ、或は板敷疊等家の二三間に散らさぬ所もなし。日蓮大高聲を放ちて申す、アラ面白や。平の左衛門の尉が物に狂ふを見よ。殿原但今日本國の柱を倒すと、よばはりしかば、上下萬人あはて、見へし也』

斯くて上人は召捕の身となり、裸馬に打ち乗せられ、鎌倉の町々を引き廻はされ、氏神たる八幡の鳥居前に差しかつた時、方々暫らくと馬

止めてヒラリと躡り下り、有名な「八幡諫曉」と云ふ一段となり、日蓮は法華經の行者である。身に一分の過ちもなきに、今日の有様は何事である。八幡大菩薩の誓文に間違がないならば、示現をあらはして然るべきではないか。日本國隨一の法華經の行者は、今宵龍の口で頸切られるのである。正八幡は法華經の行者を守護すると誓つて置きながら、知らん顔をして御座るのは何事ぞ。此宵日蓮が身に若もものがあつたならば、八幡大菩薩は嘘つきの神である。釋尊の前に押し切つて申上るであらう。夫れでも悲しくはないか。いたしと思は、いそぎいそぎ御計らいあるべし。――痛ましく思はれるならば、急いで示現をあらはされて然るべしと……一同は呆氣に取られて驚きの目を見張つて居る間に八幡諫曉もすんで、又もや馬上の人となり、さあ馬引けとあつて、遂に龍の口の頸の座に座られたが、巽江の島の方から怪しき光り物現はれ、天地

晦冥となつて頸は切れない。そこで一先命は延びて遂に佐渡の島へ流されの御身となられたのである。此外鎌倉の數ある靈跡の中で、先年田中智學居士の再修せられた日蓮上人辻説法の靈跡があるが、是は曾て七百年の昔、上人が我こそ日本國の柱なりとの大信念の下に、屹然として小町の辻に立ち、ありあふ石に腰を掛けて説法をなさると、或は石を投げ、瓦を投げ、悪罵嘲弄様々の迫害を加へたが、上人は頑として動かす、泰然として法華の正義を絶叫せられて居つた。

是れは我日本國民の代表者とも言ふべき、事實上の日本の首府であつた鎌倉中の人民に大覺醒を與へ、我が日本國こそ我が建國の大理想、六合照臨世界平和の大福音——眞の佛法を弘め出すべき神聖なる天國であり、日本國民は此天國を維持すべき國の柱であると云ふ事を知らしめたいと云ふ、大慈悲心から現はれたる菩薩行で、大難小難を事と

上人六十年の
血の叫び
は何の爲し
なすか

もせず、滿身の熱血をしぼつて叫ばれたけれ共、一向に分からない。當時兵馬の大權を握つて居つて、賢明なりと歴史家に褒められた北條時頼時宗でさへ、聖日蓮の理想の一端すらも理解する能力がなかつた。唯々昔ながらの源平藤橘の跡に倣ふて、一族一門の名利に汲々として、國家とか國民とか日本の世界に於ける位地とか、乃至日本の存在して居る意味とか云ふ様なことは夢にも念頭に浮ばず、唯々目前の利害に囚はれ、名利の奴隷となつて、親子互ひに相殺し、兄弟牆に闘いで、眼を國外に放つ餘裕がなかつた。之に反して同じ時代に出現せられた上人六十一ヶ年の血の叫びは、何であつたか、要するに我が日本國民の本來の天職に心の眼を開かしめ、一刻も早く大國民たる處の自覺を振ひ起さしめ、苟くも日本人と名のつく限り、一人々々を日本の柱であるとの信念に住せしめ、以て世界人類を救濟せしめたいと云ふのが、御一生の叫びで

かり、生命であつた。

爾來星移り物變り七百年の今日、世は二十世紀である、社會は文明である。國民の正礼は一等であると云ふが、同じく日本の國民として諸君お互と血筋を分けた我々祖先の一人たる、聖日蓮の血液が果してどの位通つて居るのであるか。諸君も我々も共に上人の吸はれた同じ空気を吸ひ同じ水を飲んで居るではないか。七百年の昔は何分未開でと言はゞ、それでも言ひ譯は立つかも知れぬが、自から文明と名のり開化と唱へながらまだ眼が醒めません、まだ克く自分が見へませんとは、どの口を以て言はれるであらうか。上人は定めて我々の低腦魯鈍殆んど土偶にも等しかるべき有様に、嚙齒庠く思し召されて居るであらう。吾は既に七百年の昔、上人のやうな大先覺者を有し、天地に響く大獅子吼は、今も尙ほ餘蘊なくとして、鳴きざるに、我々國民の神經の痼疾さは、何と

言へばよいか、實に形容の言葉もない、一寸の目先は敏いかも知れぬが、精神の歩みの緩ろいことは蝸牛のそれよりも甚しい。一茶と云ふ俳諧師の名吟の一つに……「かたつむり、そろ／＼登ぼれ富士の山……」と云ふのがある。富士山は日本第一の高山であり、蝸牛は非常に歩行の遅いものである。其の蝸牛に「そろ／＼上ぼれ富士の山」之れを教訓として見れば、忍耐を教へたものであらうが、之れを悪い方からの一例として解釋すれば、日本國民の自覺の遅きことを諷したものと見られるであらう。斯う云ふ遅々たる歩みを以て山の頂上劔が峯まで漕ぎ付けるには、餘程の年月を要するであらう、否、終生達することが出来ぬかも知れぬ。

翻つて日本國民が踏み來つた自覺の歴史を辿つて見ると、其の自覺が内部から出たのではなく、多くは外部の力に壓迫され、外國の力に打附

かつて額にタン瘤を出し、痛い思ひをして少しづつ自分と言ふものに眼がさめて来たのである。近い所を言ふと、先づ手始めに支那に打附かつた。此の時支那が勝つか、日本が勝つか、世界中で賭をして、無論支那が勝つに極つて居つた。處が實際の結果は御承知の通りである。而も日本は連勝連捷で、支那に賭けた者は皆な負けて仕舞つた。夫れが二十七八年役である。ハテなど少し眼が醒めて来た。夫から十年経つて日露戦役となつて、又少し醒めて来た。大正の役にも其通りで、其の自覺が何時も外部の壓迫を受けて、止むを得ず打附かつて後始めて自己の價值、力量に氣が付て来る。幸に毎時も勝つたから可いが、若しあの時負けて仕舞つたとしたら日本は果してどうなつたであらう。今迄勝つたから此後何時でも勝てることは極められない。天佑は毎時でも國民が舉國一致になつて、眞面目に國家の理想の爲めに、世界平和の爲に戦つた時に下つ

て居る。戦へば必ず勝つものと極め込んで、人事の誠を盡くさず、徒らに傲つて居る様な國民に、天佑は決して下らない。兎に角我國は勝つたと云ふことになつて、萬國無比の國體を擁護し、識らずく建國の大理想を盛り立てつゝ、少くとも軍事上に於ては立派な國民として、一等國に列したのであるが、未來永劫に互つての我國の天職を思ひ之に貢献すべき吾々の天分を考へて來ると、唯々一先づ負けなかつたから宜かつたでは可かん。一日も早く、日本全國民の大導師日本國家的世界主義の宣傳者たる、聖日蓮の教に基いて信仰的に自覺しなければならん。日蓮を倒すは日本國の柱を倒すなり』との自覺に七千萬の同胞が舉つて目を醒さねばならん。心眼を開くと云ふ精神修養の良法は、順序上先づいきなり偉大なる「日本の柱たる上人の人格に打附かつて、果して如何なる手答へがするか」「日本の柱の眞の力量を試めすが、一番だ、自分の人格

精神修養の直接の
人上人たる
格にあり

の力個性の弾力乃至國民としての精神生命に如何なる反動を及ぼすか、夫れを驗して見るがよい。日の下開山横綱がどの位強いものであるか、棧敷から眺めて居るだけでは分らない。自から禪を締めて、ウンと一つ打つかつて、地から生へ出た巖石の如く貧乏ゆるぎもしない底力の強さを感じる所に、眞の偉大なる信念の力を與へられるのである。以心傳心——成る程どうなづかるゝ所に宗教の眞價がある。其處で自分^は靈界の維新と云ふことを諸君の前に絶叫し高調する。物質文明の自覺は専ら外部的殊に歐米の力に頼つたが、精神文明の自覺——内部の方面までも西洋の御厄介になりたくない。我が祖先には吾々をして其の行くべき道に往かしめやうと言ふ大先達たる聖日蓮を有して居るではないか。國産的宗教の發明者創設者として、信念の上から我國體の眞相を明にし、日本の世界的天職を示された大人格者を有しながら、遠

靈界の維新
に對する
奮闘

く外を探すなぞとは、迂遠千萬でないか。上人が日本に對する大自信の力に諸君自から打附かつて見て、諸君が國に對する自信と孰れが強い^か、一つ試してもらいたい。明治の初年に於けるが如く僅かの少數者だけでなく、大正國民の全體と云ふものが、大男も小男も女も小供も、有りつただけの力を出して打附かつてほしい。若し一度に行かねば、セメテは教育あり文字ある處の諸君、世界の^大勢を理解する頭腦のある諸君、人のことは第二として先づ大正の青年を以て自任する諸君自からが、上人の大人格に打附かつたならば、夫々の力に應じただけの響が出るに相違ない。三井寺の大梵鐘も辨慶は辨慶、吾々は吾々と力相應の音より外に出るのではない。實際撞木も握らずに居て、自分は力が強い、と自惚れても、それは所謂蔭辨慶である。今日の急務は、内に自から眼を覺まして眞の自分自身を知ると云ふこと、——自己と國家、國家と世界と

如何なる方面に砲火を開かるゝであらうか。膨脹に膨脹を重ね來れる我財界は如何にして維持して行かれるであらうかと云ふ、手近かな問題から出發し、彼の朝鮮同化の實は如何にして擧げられるか、日支の親善は如何、平和會議に對する方針は如何、世界の精神界は如何に變り行くかと、慎重冷靜に落ついで、我々國民として進む可き針路國家として執るべき方針如何と大に考へて、政治も實業も、軍事も教育も、總て日蓮主義を根底としなければ、日本建國の精神、國體の本義を實現することは出來ないと云ふ事に一刻も早く心眼を開いて所謂「異體同心、水魚の思いをなし」上下一心、舉國一致し、一大團結の力を以て進んで行かなければならぬ。實業の方面でも思想の方面でも、我々一人の力は微力であつても、夫々國家共同の目的に向つて心を一つにし、所謂聯合軍を組織して、正々堂々と世界的大競争の舞臺に立たなければならぬ。斯かる時

局の大切なる時に方りて、自分は特に上人をば思ひ起して、遙かに七百年の昔を偲び更に今日に思ひ合せると、如何しても日蓮主義の實現に突進せずには居られぬのである。聖日蓮一代の歴史に表はれたる、あの様な超人的の偉大なる力は全體何處から得來つたのであるか。之を諸君銘々で慎重にお考へを願ひたい。是は強ち昔を追懷するにはあらずして、吾々お互が小日蓮に生れ替らんが爲であり又、一人一人が「國の柱」と成らんが爲に外ならぬ。其の材料には各種の祖書が澤山ある。上人自から筆を執つて書かれたもので、近世の學者歴史家の筆になつたものでもなく、文飾されたものでもなく、「種々御振舞御書」の如き立派なる上人の自叙傳もある。其他十部祖書の如き、男女夫々の信徒に與へられた文書、消息、手紙の類に至るまで、全部集めたものが二千頁以上もあつて「日蓮上人御遺文全集」と銘じて池上の日宗社から出版せられ、近頃獅子

王文庫から「類纂御遺文全集」と言ふのが出版された。又之に對する御眞筆等も中山、池上、身延等の名山巨刹には大切に保存されて居る。諸君が上人に打附かる處の材料は先刻諸君の前に備はつて居るから文字あり考へある青年諸君は、徒らに吾々の言ふことに盲從せよと云ふのではない。自分は飽く迄も諸君の人格、諸君の學問、諸君の思想を尊敬するが故に、之れを批判し、解剖し、綜合するのは諸君の自由に任せる。先づ諸君自から打附かつて見て、どう云ふ手答へがするか、それが會得が出来た上で更めて諸君と膝を突合せてお話をする時期が来るであらう。

諸君今日の大戦亂の根本は何であつたか、即ち獨逸である。腕づくの軍國主義の傳道師は誰であつたか、カイゼル其人である。曾ては我國を直指して黃禍論を振り廻はしたカイゼルは、今や白禍の發頭人であつて、是れ則ち黃禍にあらずして白禍である。白色人種こそ、あべこべに世

安世安國
の外に忠
孝ありと
となし

界の平和を紊しつゝある禍ではないか。之が爲めに我々黄色人種は枕を高くして寢られぬと云ふ迷惑を被つて居る。處が我々純粹日本國民の代表的偉人たる聖日蓮は、立正安國と云ふ日蓮主義の理想を養正建國——王道實現の皇室に宿し、我國を起點として世界一家の眞實淨土を建立すべく、尊き努力の手本を後世に貽されたので、其目的は諸君をして一人も残らず皆自分と等しい「國の柱」たる純忠孝主義の人間にしたいと云ふ外に何にも望みはあられる筈はないと思ふ。文字は忠孝でも思想は決して支那の小忠孝ではない……

『世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す』……この明快なる宣言の如く、上人の忠孝觀は即ち「立正安國」と云ふ四文字に現はれて居る通り「天地の公道、人倫の常經」たる法華の經力を以て一切生活の根本となし、理知に偏せず、感情に流れず意志に片寄らずして、智、情、意の三者

が悉く法華の信仰の上に完全に發達する様になり、日蓮主義の信が常に其の統一の中心となつて居なければならぬ。主義のない生活を無意義な生活と云ふのである。斯くて種々の方面に安國主義の信念を實現せしめて、吾人の住んで居る「娑婆が即極樂」となるのである。

此の娑婆を離れて、疾くの昔から、チャンと出來上つて居る極樂を求めて懐手で之に往生をきめ込まふなど云ふ横着な考は、日蓮主義の敵である。我々は生々世々、自分の手で極樂を造り出すべく努力し行かねばならぬ。眞の楽しみは其の努力を積みつゝ進み行く裡に宿るのである。座つて居ても、立つて居つても、此の儘此處を極樂に變ずるのが立正安國の教である。是れが法華經の精神、生命である。自分一人で極樂參りをしようなどと云ふ個人主義ではなくして、寧ろ法華の信仰を基として國家全體を成佛せしめようと云ふのである。國家が成佛すれば吾人

個人の成
佛の成
國家の成

の成佛は皆な其の中に這入つて居る。世界人類の成佛と云ふも先づ此の國家の成佛が基點となつて實現されるので、今日は何事によらず國家を離れて議論することは出來ない。それも出來合の國家では駄目で先天的の理想の下に建てられた日本の様な國家でなくては駄目であつて、法も貴く國も尊く二つが揃はねばならぬ。日蓮主義が純日本的でなくてはならぬのは此の理由があるからで、日本の特色を持って居る天下一品の宗教である。其の組織、其の系統、其の説明等、悉く上人獨創の色彩を發揮して居る。吾々お互は斯う云ふ國産的——純日本式の大宗教を持ちながら、其の價值をも知らず、所謂寶の持ちぐされ、徒らに隣のバタ臭い安料理に鼻の先を動かして固有の日本料理の眞味を解せず居るとは如何にも残念と思ふ。先年千葉縣香取郡全體の巡回講演の砌或學校の大講堂で講演の後、校長先生の告白に……「今日の御講演は不

思議にも自分の日頃確信し且つ實行しつゝある教育主義教授法と同
一で、唯我々の日は日蓮主義と明言しないだけの相違である——實に愉
快に且つ心強く感じた次第である……と詐らず飾らず誠意を込めた
る物語の末に、自分の教育主義——教育の理想は是ですと、かんま相間に掲げ
ある自作の三十一文字を指さされた。見ると筆蹟も殊の外見事で……
『年々に植えし小松の末つひに國の柱となるぞ樂しき』……と誌され
てあつた。單り教育ばかりでなく、諸君夫々の生活生業の上に此の校長
先生と同一主義——日蓮主義——國柱主義を以て自分も國の柱とな
り人をも國の柱たらしむべく奮進努力せられたならば、是れ實に内、國
運の進歩を促がし、外、世界の平和に貢獻する所以ではないか、返すく
も諸君の猛省を促がす次第である。

本論

八 立正安國論の梗概

以上序論の七節に於て、大正の「青年と日蓮主義」との關係を略述した
が、是より進んで「日蓮主義とは何ぞや」の本問題に入らねばならぬ。併し
ながら之を根本的に解釋するには少くとも法華の教義から説き起し、
更に一面に於て聖日蓮の重要教義たる五綱、三秘等の専門的研究に入
ると共に、他面に於て其の人格と教義と互に相照し相關して居る點な
ぞを考究しつゝ進んで行くとなると、是れ容易の事ではない。殊に日蓮
主義の現代青年に對する應用面を主とせる小著としては、到底そこ迄
の餘裕がない。乃ち己むなく、上人の御遺文中から立正安國論を選び出
して其の梗概を述べ、以て日蓮主義の輪廓を彷彿せしめることとした。

日蓮主義の組織的研究と其の解説とは他日に待たねばならぬ。聖日蓮一代の活動は實に鎌倉時代で、日本宗教史の上では正に近古の部に屬して居る。即ち後鳥羽天皇の承久三年に、源頼朝が幕府を鎌倉に創めてより、後陽成天皇の慶長五年九月十五日、徳川家康が石田三成等の軍勢を關ヶ原の一戦に打破り、越えて慶長八年征夷大將軍に任ぜられて、新幕府を大江戸に開き、日本六十餘州の覇權を掌中に握るに至りしまでを云ふので、此間四百餘年、武門争權の戦亂殆んど絶ゆることなく、親子兄弟互ひに敵と呼び仇と狙はれ、昨日の足輕は今日一城の主となるなど、榮枯盛衰、有爲轉變の世の有様、痛くも人心に沁み渡りて、半ば娛樂として弄ばれて居つた從來の佛教は、始めて眞摯敬虔の態度を以て敬仰せらるゝ様になり、無常迅速の現世を厭ふと共に、未來後生の冥福果報を祈るの風、漸々に社會の各階級を靡かし、宗教心の高潮は殆ん

鎌倉時代の概観

ど其極度に達した、爲に幾多新宗教の勃興を促がし、從來の理論的外的佛教は、著しく實行的内的となり、曾ては遙かに宮廷の高きに局られたる佛教の流れは、一轉して武士乃至平民の廣き野原に、縦横無盡に流域を擴げることゝなつたのである。法然上人に依て開かれたる往生淨土の念佛門と、日蓮上人に依て創められたる即身成佛の日蓮主義とは、京都系の思想と關東系の思想の代表とも見らるべきもので、鎌倉佛教の精華は正に此の二宗に在りと謂はねばならぬ。

聖日蓮の背景

時しも源平紅白の戦ひ漸く収まり、源頼朝幕府を鎌倉に創めて封建制度の基を開き、日本六十餘州兵馬の大權を集中すると共に、京師の繁昌は歳と共に此方に推移し、弓矢の勢力は飛鳥も翼を斂むるの有様であつた。外戚の資縁を手蔓として、首尾よく天下を乗つ取れる北條一門、相次で愈々幕府の礎を固め、義時泰時を経て時頼の代となれば、偏へに

民心の収攬に肝膽を碎き、薙髮入道して最明寺を建立し、遍ねく諸國を脚行して、輿論の赴く所を察し、自から九十六條の式目を勵行して、文武二道の範を示すなど、所謂「北條執權」の呼び聲は、實に獅子王の一吼、能く百獸を恐れ戰かしむるが如く、星月夜、鎌倉山の一草一木に至るまで、其威光に靡かぬものは無かつた。

而るに頭を回らして皇室の御有様如何んと見奉れば、秋の螢のそれにも似て、實に史上未だ有らざるの慘況を呈しつゝあつた。其子時宗も、亦能く父の志を辱しめずして、同じく禪門に歸依し、彼の建長寺の大伽藍は、優に三年の日子と、山なす黄金とを積んで建立せられたのであつた。左れば天下の心は、悉く北條一門の雙手に握られ、此處暫しの小康に腹鼓を鳴らし、壤を撃ち、天下太平謳歌の聲は、津々浦々にも響きを傳へ、外敵襲來と言ふが如きは、夢にだも想ひ及ばぬ所であつた。

翻つて、歐洲の狀態如何んと見れば、コロンブスは、彼の新大陸發見の偉業を計畫するの以前に屬し、我東洋諸國の存在の如きは、素より彼の胸中に思ひも寄らぬ所であつた。此時に當つて、野心勃勃、膽斗牛を呑むの慨ありし元主忽必烈は、既に千餘の隣邦を撃ち平らげ、武光遠く西國に波及し、伊太利人マルコポロを參謀の樞機に置き、高麗王趙彝の策を用ゐて、徐ろに日本併呑の深謀をめぐらし、あは、や、我が瑞穂の靈國を馬蹄の一蹴に付せんとした有名なる元寇事件の胚種は、疾く已に此時に萌して居つたのである。

斯くて我國の政權を集めたる鎌倉は、亦文學美術宗教等、一切文化の焦點たるべきは固より必然の勢で、所謂鎌倉五山を中心として、輪奐たる彼方此方の七堂伽藍は、不斷の雲の峰かと疑はれ、八宗九宗の名僧智識は、錦繡の三衣を龍田の秋の紅葉と競ひ、鬚髯勇ましき武將名門は、星

の如くに幕下に集ひ、日本一國の繁昌は、全く此處鎌倉に止めをさして居つた。

北條氏の政權集中に對して、當時民間信仰の霸權を握れる、淨土門の開祖法然上人寂して後十一年、幕中流已上武門の歸依を獨占せる、臨濟禪の宗主、榮西禪師の入定より八年に當れる、後堀河帝の御宇、貞應元年二月十六日(西曆千二百二十二年)東海の邊土、房州小湊の浦に、呱呱の聲を揚たる、貫名の次郎重忠の一子、善日麿は、十二歳清澄山に登り、十六歳道善法印を師と頼みて剃髮得度し、名を蓮長と改めてより以來、或は叡山に或は高野に、京師に鎌倉に、有ゆる名家の門を叩き、諸子百家の學にも涉り、殊に法華本門事觀の玄底に、本佛別付の神祕を會得したる聖日蓮は、此處暫し九萬里の鵬翼を斂めて、竊かに時機の熟するのを待つて居つた。

時正に釋尊滅後の第五期、即ち末法の初めに方り、大集經に所謂五箇の五百歳中、最後、白法隱沒の時——法華經に據れば、則ち妙法廣布の季に入つて二百年、佛教の傳弘殆んど全盛の頂きに達し、實に三國に其比を見ずと稱せられしも、是れ唯白く塗れる墳墓と等しく、外觀の花々しきだけ、内部の醜穢は言語に絶し、釋尊出世の本懐は泥土に委せられ、佛法正義の光は、全く諸宗増上慢の大天狗小天狗輩の我見に隠蔽せられて仕舞つた。

即ち南都の舊佛教たる律宗等は、小乘律に因はれて法華の大王戒に背き、真言祕密の教徒は、娑婆世界の主釋尊を貶して、別に高く大日如來を崇め、禪家喝棒の一流は、教外別傳不立文字と稱して、教主並に經典を輕しめ、往生淨土門の類は、他力念佛を主唱して釋尊を排し、一向阿彌陀佛を敬ひ、各々其習ふ所に依り、一經一論の末節に拘はり、區々の小經

に、走り、我が釋迦宗教根本の大道を忘れて、恰かも群雄割據の變狀を曝露して居つた。あはれ、鎮護國家は只名のみとなり「白法隱没」の豫言は、符節を合すが如く、今は已に疑ふ可らざる事實となつて居つた。

斯る末法の危機に際して、若し一大教傑の出現して、快刀亂麻を斷ち、教法の雜亂を糺し、大義名分を叫ぶ者なかりしならば、佛教の實義は、必ずや長へに地を拂つたであらう。左ればにや、三世達觀の釋尊は、二千年の古昔、疾くも此事あるべき明察して、法華經第七の卷、神力品に於て、末法救世の大任、宗教統一の大權をば、本化上行菩薩に付囑し給ひし所以である。

宗教の正系を攪亂し、國體の神聖を毀つげ、正義人道を撥無し、僧も俗も上も下も、日本一國、滔々相率ゐて謗法の渦中に漂はされ、六十餘州の廣き、誰一人として之を怪しみ、之を慨く者もなく、後世頼山陽をして「北

條氏の事、吾之を言ふに忍びず」と、喟然史筆を抛たしめたる承久の亂には、畏れ多くも、後鳥羽法皇を隱岐の孤島に、土御門上皇を土佐の邊土に、順徳天皇を北海佐渡の離れ嶼に流し奉り、あはれ一天萬乗の君主をして……

「我こそは新島守よ隱岐の海の荒き浪風心して吹け」

「啼けば聞くきけば都の戀しきに此里過ぎよ山ほとゝぎす」

と、衰龍の御袖に、旅寢の露の乾ぬ間もあらざりし暴虐の舉措に、一人の之を諫諍する者も無かりしとは、殆んど信を措くに苦しむばかりである。實にや、根幹疾く既に枯れて、枝葉のみ徒らに秀いで、粉黛錦袍の殿上人を唯一の對手として、禁厭呪咀儀式法會に山なす施物を貪つて居つた、平安朝の官僚佛教の隋勢は、更に鎌倉時代にも推し移りて、適れ人天の大導師たるべき僧伽は、臆面もなく、王者不拜の圓顛を、武人權門の前

に屈して、寺塔の勸進を事とし、燦然眼を奪ふ金襴の袈裟の色に、俗衆の
 渴仰を買ひ、活如來の虚名に法悦の微笑を湛へ、往生未來主義の弊は、現
 世輕賤の風潮を高め、天下の人心は益々邪道に迷ひ入るのみであつた。
 宜なる哉。日本國守護の善神爲に去り、魔鬼は便りを得て、倍々人心を
 惑亂し、大法の力爲に没し、列聖の威光爲に闇く、人心を安んずべき教法
 は斯くて滅却し、人命を立つべき國家は、斯くて亡滅の報いを蒙らでや
 はあるべき。

果せる哉。正嘉の初めより文應に亘りて、天變地天に次ぐに、飢饉疫癘
 を以てし、阿鼻叫喚の活地獄も斯くやと疑はれ、凡眼ながらも、只事とは
 思はれぬ年毎の凶事に、豫じめ未萌を知るの偉人聖日蓮如何んぞ宿昔
 の默契、此間に感發せずして已むべき。

左れば、去ぬる建長五年四月二十八日、房州清澄の山頭旭ヶ森に、釋迦

岩本實相
 寺に經入
 一に切て
 讀を志す

正宗の建立を宣言して「念佛は無間業」禪は天魔の所爲「眞言は亡國の
 教」律は國賊の邪法」と。四箇の格言を絶叫せしこそ、實の正義公憤の爆
 發に外ならなかつた。

正嘉の大地震を筆頭として、年々歳々の天災地變は、正に此の宣言に
 對する天來の裏書であつた。いで、兼々より散見し置ける諸經の適文を
 蒐録して天下人心の迷濛を啓かばやと、暫し公憤の血潮に躍る胸を押
 へて、茲に駿州富士の山麓、岩本實相寺の經藏に這入る事となつた。

空前の大震災を現じたる翌年、即ち正嘉二年午の正月の或日、三十七
 歳の春を迎へた聖日蓮は、孤影飄然として、鎌倉松葉ヶ谷の草庵を後に
 し、駿州岩本の實相寺に、所藏の一切經を閱することゝなつた。上人思へ
 らく、三千世界は、固より最高絶對の實在たる本佛の所領であつて、我國
 亦焉んぞ此の佛土に漏れんや。果して然らば、今此の年々の天孽は、其由

來する所、必ずや我國上下萬民の、本佛法王に背き、正義人道に叛けるを治罰せんが爲ならざるべからず。我れ曾て南都に北嶺に、釋尊一代の教法を閲して、疾く此事を究めたり。いでや、此の天變地天の頻りに到り、民心の恟々たるを機とし、具さに世尊の金言を摘出して災難の由來を明にし、以て日本國民一同の不信不義を覺醒せしめん……聖日蓮の胸中は正に斯の如くあつたであらう。蓋し上人の信念として、佛陀の金口は最尊最上の權威にして、是より以上の力強きもの有ることなく、従つて一言一句の微も、之を忽せにすることを許さぬ。然るに建長五年創めて佛教革新の初聲を揚げしより此方五尺の肉身六十餘州に置き所なく、四面は皆楚歌の聲、或は居を奪はれ處を逐はれ、一日片時も席を暖むるの違なく、所持の經文書冊は多く散失して、藏經の要文、具さに之を勘合することが出来ぬ。駿州實相寺の經藏は、世にも隠れなき完全なるもの

五千餘卷の
一切經の
活字の
歴史の

なりしが爲、上人は決然として、此處岩本を目指されたのであつた。活眼を以て活書を讀む』とは、實に上人の入藏に依て證明せられた。始め華嚴經より、終り涅槃經に至るまで、五千餘卷の一切經は、二千年前の印度の古書と言ふよりも、寧ろ日本當時の現狀を直寫せる、一篇の鎌倉誌であつた。従つて、五千餘卷の金文を摘録して、編み成されたる立正安國論一卷に、即ち一切經の縮圖とも、將た眼目とも見做すべきものである。伯樂に遇はざれば、駿足も空しく、權樞の間に老い、活眼、上人の如きに讀まれざれば、あれは釋尊五十年の説法も、累々たる石瓦に過ぎなかつたであらう。

岩本入藏の後、間もなく脱稿したのが御遺文中の大作として、傳へらるゝ守護國家論で、言はゞ安國論述作の準備階梯の如きものである。安國論の堂奥に入らんとする者は、是非此の玄關を叩くの要がある。超え

て正元二年、一代經の要文は全く勘合を了り、安國論の稿本たる、災難退治抄一篇は已に脱稿せられた。當時累年の天變地天飢饉疫癘は、隠れもない事實であつたが、突如として大兵亂の三字の點出せられたのは、即ち此の退治抄にて、未だ何人も夢にだも想ひ設けぬ所であつた。後世安國論を目して單に元寇の豫言書となし、上人を以て外寇國難の一豫言者となすが如きは、所謂悪しく敬はゞ國亡ぶべし」の叱責を蒙るべき輩で、最負の曳き倒しとは正に是を言ふのである。聖日蓮の新宗教に若し破壊と建設の二門を分てば、安國論は、正しく釋迦正宗の實義を顯揚すべき、觀心本尊抄發表の前提として掲げられたる、破邪の大宣言書であつて、當時の佛教各宗、皆本佛立教の大本を誤まり、末法傳道の法則を辨へず、内、教法の本末を糺さず、外、國家君民の顛倒を顧みず、斯くては王法と佛法とは竟に歸一冥合するの機なきを看破したる聖日蓮思へらく、

今若し之れを言はゞ天下の人心を驚動せしめ、一世の非議日蓮の一身に集まるであらう。若又黙して之を言はずば、此の大法の滅却、君國の大事を如何せん。

斯る世に日蓮の生れ出でけるこそ、時の不祥なれども、法王の宣旨もだし難ければ、權實二教の軍を起し、四箇の格言を旗印として、事實上の國主たる、北條前の執權時頼を日本一國の代表者と見て、速かに教法の邪正を糺し、信仰修行の雜亂を禁じ、釋迦正宗の復古に依りて、精神生活の權威を確立し、延いては上下顛倒の國家の秩序を恢復して、君臣の分を正し、妙法正義の根蒂の上に、娑婆即寂光の樂地を實現すべきことを直言せる、所謂國家諫曉の大文字は、即ち安國論一篇であつて、一面より之を見れば、單に幕府一人のみにあらずして、八宗九宗の高僧碩徳は言はずもあれ、日本一國否世界人類に向つて提出せる妙法眞理の宣戰狀

世界人類
に對つて
提出せる
思想の
退戰の
宣戰狀

である。

左れば日蓮は北條幕府の政權に依頼して、叡山出身の異流たる、法然の念佛宗を停止せしめ、以て天台の正統に復古せしめんと、醜運動を敢てせるものに外ならぬと云ふが如き、一部の評論は、不幸にして、皮相の淺見に過ぎずと斷せざるを得ぬ。若し夫れ書中煩を厭はずして反覆せらるゝ、當時の天變地天飢饉疫癘等の禍は、即ち天罰の然らしむる所なりとは、當時の常識にして、聖日蓮亦這般の思想界裡に人となりしものなれば、同じく天意天罰の一般信仰に住しつゝ、國民的大自覺を喚び起し、精神生命の尊貴なる所以を悟らしめんと、熱誠の表現に外ならぬ。

然れば則ち安國論を以て、單に蒙古襲來に對する豫言書の如く考ふるが如きは、太しき誤見にして、經文の示せる七難の中、五難既に現れた

れば、二難亦次で現前すべきや理の當然にして、敢て怪しむべきにあらず、見よや、下萬民の儀表と仰がるゝ北條幕府は、徒らに一家一門の榮華や政權の爭奪に汲々として、神聖なる大日本の使命の奈邊に在るやを看破するの明なし。況んや釋尊の本懐に悖れる似而非佛法の迷信に誑かされて、信仰生活の眞價値を認むるが如きは、夢にも想ひ及ばざりしは、正に其處にして、聖日蓮の眼よりは、實に蟲蟻同然に見えたであらう。一寸の先をも見得ぬ、吾等凡眼よりこそ不思議と見ゆれ。大觀達識の天才偉人の直覺を以てすれば、葉末に宿る露の鏡にも、三種の世間の姿を浮べ、隙間漏る一穗の月の光にも、過現未三世の實相を照して、掌を指すが如くなるやも知れず。實にや、誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり、國家個人共に私心私慾に囚はれ、至誠迹を絶つに至れば、人心爰に荒み、國家茲に擾れて、自然も亦其常規を失ない、所謂天變も起り、地天

も亦發すべき筈である。天道は固より人事に關する所にあらずなど云へる粗論は、齒牙に介するにも足らぬ。

立正安國の標題の由て來りし所如何んと尋ぬるに、先づ本論中にては、夫れ國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇む可き、法をば誰か信す可けんや。先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし。佛法は即ち正法の事なり。若し先づ國土を安んじて、現世を祈らんと欲せば、速かに情慮を回らして、急ぎ對治を加へよ、とあるのが、正しく本題の生れてたる、據所であつて、(立正)の二字は、即ち(破邪)に對し、(安國)は即ち(危國)に對せしめた言葉である。又立正は背正に反對し、安國は破國亡國に對するとも見られる。即ち本文に……聊か經文を披くに、世皆正に背き、人悉く惡に歸す。仁王經に云く、檀まに法制を作つて佛戒に依らず。是を破法破國の因縁となす、是れ破僧に非ずや、破國の因縁に非ずや、

「立正安國」と云ふ標題の由來如何

此邪義即ち選擇に依るなり……とあるなどが即ち皆それである。要之立正安國の四字は即ち法華經の極理たる、世法即佛法。娑婆即寂光の本旨により、王佛二法の融合不離の妙關係を、含蓄せしめたる題號にして彼の觀心本尊抄の妙句として、全遺文中に異彩を放てる。天晴れぬれば地明かなり。法華を知る者は世法を得べし……と言へると正に其意義を同じうするものである。

本論全篇を通覽するに、自ら十九段に別れたり、即ち九對の問答を以て都合十八段を成し、最後誓約の一段を加へて、十九段となるのである。元來主客問答往復の間に於て、自から自家の意中を明かにするの結構は、古來其例に乏しからず。古くは莊子の逍遙篇、文選の子虛賦を始めとして、弘法の祕藏寶鑰、西京賦の憑虛公子、安處先生、王子淵が四子講徳論、性理大全の漁樵問答、荆溪尊者の金鉤論の野客問答、空海の三教指歸の

立正安國論の結構

兎角公龜毛先生など、擧げ來らば際限なかるべし。聖日蓮の遺文中、宗義篇の代表として有名なる聖愚問答抄も、亦同一型の結構を用ゐしものにて、愚人と聖人との問答往復の末、遂に問者たる愚人が聖人の垂教によりて、宗旨の要領を會得し、大満足を得るの徑路を叙したるものである。而して本篇の「旅客」と云ふは、當時他宗の僧俗に配し、「主人」と云ふは、即ち本宗に擬らへ。或は問ひ或は答へ。或は怒り或は喜び。漸次に淺きより深きに及び。邪師邪法の何たるかを糺明して正法正師の何たるかを示し。破法破國の因縁を明にして、國家衰亡の弊を救ひ、人生の歸趣、世界平和の直道を提示するの妙意匠である。

鎌倉時代の文學は、典雅優麗なる王朝の公卿風より一轉して、所謂武家風の思想感情を寫し出すべき、時代自然の要求に應じて、起りしものにて、一言以て之を蔽へば、率直剛健、雅に偏せず俗に流れざる、和漢互用

の一種男らして文學とも言ふべく、従つて聖日蓮の文學も、亦時代の風尙を受けて、必然這個の特色を存すべきは無論の事なり。而も、上人の文章として、汎く世に知られしは、固より安國論を第一に推せども、こは其文學としてよりも、寧ろ其取扱はれたる材料の異常なりしが爲に、人目を惹きたるに依るなるべく、本篇を以て、剛壯雄渾なる上人の文學を代表する作物と見做すは、斷じて其當を得たるものではない。何となれば安國論の文致は、寧ろ擬古駢體の古體を學びたる、純クラシツクのものにて、時代文學の特色は、却つて整然たる形式、粉飾せる字句の末技に隠され、潑刺たる上人の意氣、鋒々たる大人格の響きは、明白に覗ひ知ることは出來ぬ。故友小泉叟骨の評論は、概して吾が意を得たるものである。曰く「安國論を以て上人の文章を議せんとするは、吾其可なるを見ず。然も此一書に顯はれたる思想は、豫言者が天示の警告を齎したるもの、

強大なる權威は文學以外に表はれたり。冒頭筆を天災地變の慘狀に起し、具さに惡時代の恐るべき様を描き出して云く

旅客來嘆曰。自近年至近日。天變地天。飢饉疫癘。遍滿天下。廣迷地上。牛馬斃。巷骸骨充路。招死之輩。既超大半。不悲之族。敢無一人。中略。哀萬民百姓。而行國主國宰之德政。雖然。唯摧肝膽。彌逼飢疫。乞客溢目。死人滿眼。臥屍爲觀。並作橋。觀夫二離合。壁五緯。連珠三寶。在世百王未窮。此世早衰。其法何廢。是依何禍。是由何誤。乎。中略。具觀當世之體。愚發後生之疑。然則仰圓覆而吞恨。俯方載而深慮。情傾微管。聊披經文。世皆背正人。悉歸惡。故善神捨國。而相去。聖人辭所。而不還。是以魔來。鬼來。災起。難起。不可。不言。不可。不恐。

博大なる思想と、燃犀の眼光とを以て時代を戒飭し、民衆の覺醒を促したる豫言書安國論の、如何に雄大宏壯を極めたるや。謗法の惡因に酬

いて、國土に現はるべき七難の相を叙する邊り、宛然舊約全書中、吟巴香に於る亡國之歌を誦するの心地す。四民堵を失ひて、天日暗く、田野荒蕪して、悲泣の聲國中に充つ。慘憺たる光景委曲に描き出されて、讀者をして膚に粟を生せしむ。斯の如き威嚇を以て、一代の人心を壓迫せる上人の權威は、具さに此一書に現はれたり。則ち安國論は、此點に於て一篇の長詩なり、悲曲なり。總じて上人の文章には、常に權威の文底に横はるあり。氣魄紙上に躍動して、讀者の肺肝を衝く。是れ上人の熱情の宿ればなり。靈火筆端に迸りて、人をして正視する能はざらしむる底の文致は、聖日蓮を措て、之を他の詩人宗教家の筆に求むべからざるなり。安國論は、實に上人が人格の一面を遺憾なく彰はしたるものにして、所謂須彌を以て墨とし、蒼海を硯とし、大虚空に染め出されたる大文章なるものか。と今假りに移して以て、安國論の文學の批評に代へた次第である。

時正に文應元年七月十六日、國諫の上書安國論は幕府の政廳へ進達せられた。其後、九年を経て蒙古襲來の兆を表はし、二十二年を過ぎて案の定、弘安四年の國難となつて表はれた。惜哉。大聲竟に俚耳に入らず、良藥定んで口に苦がしの喩に漏れず、幕府擧つての不明は、管に之を用ふるの雅量なきのみならず、長袖圓顚の分齊として、妄りに天下の政道を誹議し、諸宗を嘲けるは、大膽不敵の所行なりとて、弘長元年五月十二日伊豆に流罪となり、叙いて文永八年九月十二日、再度の諫曉に依り、名も恐ろしき相州龍の口に斬首の極刑に問はれ、天來の不思議に助かりたる一身は、越えて十月、北海の寒山佐渡ヶ島に遠流となり、鎌倉松葉ヶ谷の焼打と云ひ、房州小松原の刀難と云ひ、或は處を追はれ、弟子を殺さるゝ等、大難四ヶ度小難數知れず」と稱さるる程なりしも、信念彌々固く、意氣益々昂り、白熱の舌頭、到る處に侃侃諤々、の議を唱へ、終始一貫、克く佛

の上大人一生
の難は安國
論より起

使上行の再生たるの大任務を恥しめず、天下に先つて國を憂ふて、國士たるの天職を完うせられたる者、古今東西の史上、誠に其比儔を見出し難いのである。

彼の「天佑、天助」なる言が、人力以上の救を意味し、「天威、天罰」なる語が、無限の權威を以て人心を恐怖戰慄せしめたるの當時、逸早くも此の天を紙とし、日月を筆として、時に起れる年々歳々の天變地天を捉らへ、刺さへ、畏敬崇拜の極點、人間理想の權化として仰がれし、三世十方の佛陀を證據人として、一々の由來を數多の經典より引き來り、動かし難き眼前の飢饉争ひ難き年々の大旱洪水の凶變に乘じ、此の天の怒りこそ、外道の邪教を奉じ、法華の正法を用ゐざるが爲めなりと斷じ、中にも三災七難の内、「自界叛逆難」とて、北條一門に同志討の謀叛あるべき由と、他國侵逼難」とて、蒙古の大軍、我國を侵すべき旨を高調し力説して、豫言の信仰

に、油を注ぎ、時代人心を復活せしむべく、自然の靈氣に生みなされたる自然兒聖日蓮は、飽く迄も自然のまゝに行動して、櫛風沐雨六十年の一生に、久遠不滅の生命の威力と、その効果を實現したるものである。一見日本國家の滅亡を祈り、天地に訴へ魔鬼をそゝりしが如き觀なきにあらざれども、王佛二法の大忠臣たる、偉聖の肺肝より迸しれる、針の如く劍の如き安國論一々の文字の底には、滾々として汲めども竭きぬ、法思國の熱涙の溢れつゝあるを見逃してはならぬ。

斯の如き一字一涙とも謂つべき國諫の上書立正安國論は、執奏宿屋入道光則の口を藉りて、朗々として、執權職の面前に披露せられたのであつた。聖日蓮の法華經眼を以て當世を觀れば、年々歳々の暴風暴雨、星宿變恠、夏雪冬雷、飢饉疫癘等は、皆是れ諸天の邪信を戒め正信を獎まし給ふ空中の大音聲と聞えたのであつて、法華經第七の卷、神力品の中に

上人の信
生に活に
表れに
る久遠の
命

.....

「即時に諸天、虚空の中に於て、高聲に唱へて言く、此の無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過ぎて、國あり、娑婆と名づく。是中に佛有り、釋迦牟尼と名け奉る。今諸の菩薩の爲に、大乘妙法蓮華經を説き給ふ。汝等當さに

安國論の文は
人問てあり
字にあらば
すしにあらば
上の佛のな
り本佛のな
殿誠なり

深心に隨喜し、亦當さに釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし……とあつて、吾等の歸依し信賴すべき、娑婆世界唯一の救主は、即ち本佛たる釋迦牟尼佛あるのみである。此本佛、今や現に、汝等末法は一切衆生の爲に妙法蓮華經の五字を説き示し給へり。汝等當に至心に住して、此妙法を信じ、娑婆の本主たる釋迦牟尼佛を禮拜し供養せよ、との御示しである。聖日蓮は正に天眼を以て、天空の金字を讀み、天耳を以て、空中の靈音を聞いたのである。凡眼俗耳は之を天變地天と見、疾風迅雷の聲と聞いたのである。唯これ諸宗の邪惑を糺せよ、信仰本尊の雜亂を矯めよ、華

華經の正義に依て、萬民墮獄の重罪を救へこの嚴誠もだし難く、直ちに七寸の管城を揮つて、之を人間の文字文章に翻譯したるもの、即ち立正安國論の一篇である。而も天意急にして一刻の猶豫を許さぬ、急々對治を加へよと、聖日蓮重ね／＼の要求は、日蓮自身の要求にあらずして、本佛法王の嚴令に外ならぬ。

果せる哉。文應元年七月十六日、本論を公廳に上進してより九年を経て、文永五年一月、蒙古の牒狀始めて我國に到來し、他國侵逼難の瑞相、佛陀の金言と符節を合せしが如く、寸分の相違もなし。即ち一國災難の由來は、徧へに彼の邪法流布の爲めに、日本人心混倒して國體の神聖を汚し、其の天職を忘れたる天罰なりしことが、明了となつた。蒙古の牒狀到來の後、聖日蓮の自から本論の後に附記したる『立正安國論奥書』に云く『去る正嘉元年太歲丁巳八月二十三日、戊亥の刻の大地震を見て之を

勘がへ。其後文應元年太歲庚申七月十六日を以て、宿屋禪門に付して、最明寺入道殿に獻じ奉る。其後文永元年太歲甲子七月五日、大明星の時、彌々此の災の根源を知る。文應元年より文永五年正月十八日に至る迄、九箇年を経て、西方大蒙古國より、我朝を襲ふべきの由、牒狀之を齎す。又同じき六年、重ねて牒狀之を渡す。既に勘文に叶ふ之に準じて之を思ふに、未來も亦然るべきか。此の書は、徴ある文也。是れ徧へに日蓮の力にあらず、法華經の眞文、聖の感應する處か。文永六年太歲己巳十二月八日、之を寫とす』と。

當時、世界の交通未だ開けず、通信の便備はらず、日本の國內に於てすら、都鄙の間隔は、百由旬も雷ならざるの有様なれば、況してや、海外萬里異域の事情の如き、何等消息の通すべき由はなかつたのである。而も其來襲を豫知するや、一年ならず、二年三年ならず、九箇年の以前に於て『先

難是れ明かなり後災何ぞ疑はん』と言ひしもの、古今の不思議之に過ぎたるものはあるまい。

然れども、是れ一應の事なり。再應之を考ふれば、是れ不思議にして不思議にあらず。何となれば、單に九箇年と云はず、已に二千年の太古に於て、佛陀は明かに他國侵逼難あるべき事を豫告せられてあるからで、是れ偏へに日蓮が力に非ず』と云ふは是が爲である。左れど、若し當時の日本に聖日蓮なかりせば、佛陀の經典は、虚言妄語となりて、一片の反古と其價を同じうしたであらう。然るに經文の一字一句は、悉く聖日蓮に依つて事實の上に活躍せられ、斯て佛陀の金言は、九鼎大呂よりも重きをなしたるの因縁こそ。古今天地間の一大不思議と謂ふより外はない。即ち經文に三災ありと云へば爰に三災あり、七難あるべしと云へば乃ち七難亦來る。殊に法華經の如きは、末法の初め、法華の行者には三類の強

日本國に
聖日蓮が
佛の金言
で一片の
反古なる
べしなる

敵とて、第一、無智凡俗の悪口罵詈訕刀杖瓦石。第二、一國僧尼の邪智迫害。第三、似而非高僧碩徳の讒言陷穽等の諸難の並び起るべきを示されてある。然るに不思議や、是等法華經の眞文は、悉く日蓮一人の身に當り、言はば日蓮の一身は、即ち活ける經典——手足の生えたる法華經となつたのである。……

『八萬四千の法藏は即ち我身一人の日記文書なり』……と道破せられたのは、實に偉大なる信念の叫びであつた。

聖日蓮の自敘傳たる『種々御振舞抄』に記して云く……
『佛記して言はく、我が滅後正像二千年を過ぎて末法の始めに、此の法華經の肝心題目の五字計りを弘めん者出來すべし。其時、惡王惡僧等、大地微塵よりも多くして、或は大乗或は小乗等をもて争はん程に、此の題目の行者に責られて、在家の擅那等を語らひて、或は罵り或は打ち、或は

牢に入れ或は所領を召し、或は流罪或は頸を刎ぬべし。然りと雖も、退轉なく弘むるならば、仇を爲すものは、國主は同志打を始め、餓鬼の身を喰ふが如くならん。後には他國より攻めらるべし。是れ偏へに、梵天帝釋、日月四天等の法華經の敵なる國を、他國より責めさせ給ふなるべしと説かれて候ぞ。各々我が弟子と名乗らん人々は、一人も臆しおもはる可らず。親を思ひ、妻子を思ひ、所領を顧みること勿れ。無量劫より以來、親子妻子所領の爲に身命を捨てたる事は、大地微塵よりも多し。法華經の故には、未だ一度も捨てず。法華經をば若干行せしかども、斯る事出来せしかば退轉して止みにき。譬へば湯を沸かして水に入れ、火を切るに遂げざるが如し。各思切り給へ。此身を法華經に替ふるは、石を金にかへ、糞を米に換ふるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天台等、妙樂、傳教等だにも、未だ弘め給はぬ。法華經の肝心、諸佛の眼目

吾人の必竟
法華經を
在華に
行法を
爲めざらん

たる、妙法蓮華經の五字、末法の初めに、一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に、日蓮さきがけしたり。若黨共、二陣三陣つゞきて、迦葉、阿難にも勝ぐれ。天台、傳教にも超えよかし。僅かの小島の主等がおごさんに怖ぢては、閻魔王の責をば、如何んがすべき。佛の御使と名のりながら、臆せんはむ無下の人々なり』

と。是れ豊、吾等門下に令し給ふ、妙法義軍の總指揮官たる、聖日蓮の號令にあらずして何ぞや。五字七字の玄題旗は、翻翻として、勇ましく陣頭にひるがへれるに、吾等後陣の歩みの遅々たる事はなきか。吾等這般の聖語を拜する毎に、冷汗背に滴り、至誠信念の遙かに及ばざるものあることを、懺悔せずには居られぬ。

九 安國論に表はれたる一大主張

(其一) 反國體思想に對する警告

文應元年七月十六日、立正安國論の奏進に切つて落された、聖日蓮活動の舞臺は、蒙古襲來の翌年、即ち弘安五年十月十三日を以て、武州池上に於ける肉體生活の終末と共に閉ぢられたが、今や最後臨終と見へし時、六老僧を始め有縁の信男信女に枕邊を取り捲かれつゝ、森嚴なる題目唱和の聲、三度一山の隅々までも響き渡るや、「日朝！日朝！」と、師孝第一と數へられし、愛弟日朝上人を近く招き、「いざ形見ぞ」とて、手から手へと渡されしは、是ぞ即ち立正安國論で「譲り與ふる立正安國論一卷！」の一句は、實に上人生活史最終頁の結語であつた。されば「立正安國」の四字は、聖日蓮出世の本懐で、多面豊富なる日蓮主義の内容は、悉く四字の

安國論に
始まり安
國論に終
る上人の
歴史

開展に外ならぬとも言はれるのである。以上十數頁に互つて之が輪廓を叙したのは、即ち之が爲で、本文の一言一句に就ての細論に入ることには本書の目的でないから、前にも言ふ通り之は略して、茲には唯だ安國論中の一二節を擡出して、其の裡に包まれたる、二大主張の面影を偲ぶだけに止めようと思ふ。

『所詮、天下泰平、國土安穩は、君臣の樂ふ所、士民の思ふ所也。夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し。國亡び人滅せば、佛を誰か崇むべき、法を誰か信すべきや。先づ國家を祈りて、須らく佛法を立つべし』……

二大思想の(第一)は反國體思想に對する警告的絶叫であつて、彼の承久變亂の悲惨なる史實に依て、痛切に國民的自覺に醒めたる聖日蓮は、抑も求道修學の初めに於て、一方教界内部に於ける信仰の状態が、八家

佛の想の反内
教の反逆部
の想の反外
的の反逆部
危の反逆部
險の反逆部
思の反逆部
體の反逆部

九宗に分裂して、各々其の本尊を異にし、人をして其歸着點の孰れに在るやを見出し難からしめ、内、佛教に對する反逆思想のいと旺盛なる有様を見ると共に、他方社會の外部に於ては、陪臣北條の一門、國家兵馬の權を恣にし、三天皇を三箇所に配流し奉り、天皇御謀反と公言して誰怪しむ者もなかりし反國體的危險思想、上下の人心に浸渡り、國體の神聖は、本實に於て全く泥土に委棄せられて居つたのである。

若き偉人の着眼は、逸早くも「國家對宗教の關係如何」の問題に集中せられた。

昔時孔子の弟子子貢が、或時孔子に政治の事を問ふた時、孔子は之に答ふるに「食を足し兵を足し民之を信す」と、即ち富國と強兵と教化との三事を以てせられた所が、子貢は重ねて「若し已むる得ずして、三者の中一を捨てざるを得ざる場合に臨まば、其の何れを先にすべきや」と問ふ

國政の根
本は神の
民精神は
建全なる
教養に在
り

と、孔子は「兵を捨てん」と答へられた。子貢更に問ふて「若し又二者の中、其の一を捨てざるを得ざる場合に、果して何れを先にすべきか」と言ふと孔子は直ちに之を應じて「食を捨てん。古より皆死あり。民信なくんば立たず」と答へられたと云ふことで、個人の上にも、國家の上にも、一刻として缺く可らざるは此の「信」の一字である。陸海軍備固より必要である。殖産興業又固より盛大にあらねばならぬ。併し、より以上に重要なるは、即ち國民精神の建全なる教養にありと云はねばならぬ。

先づ吾々個人に就て考へて見ても、其通りで、如何に金が貯り、身體が丈夫でも、其の精神に於て道義の何たるかをも辨へず、徳義の何たるかの觀念が無かつたならば、金があり身體が達者な爲に、返つて世間に害毒を流し風儀を紊し、身を誤り、人を誤まるの結果となるので、戦後の一名物となつた成金黨は、特に其の見本として著しいものである。況んや、

正義を缺ける富國を強兵は危

國家として如何に富を積み兵を強くすることも、正義の觀念が其の根底に生き、として居なかつたならば、富國の爲めに、國民徒らに驕奢に流れ、強兵の爲に、民心油斷を生じて、還つて亡國の速度を早める次第となるので、國を富ますも、兵を強くするも、畢竟するに正義公道の爲めであつて、神武天皇の御聖勅に、所謂「正を養ふが爲めに」と云ふ、大日本建國の精神は、一分間と雖も忘れてはならぬ。若し之なくして、徒らに兵強く國富まば、殷鑑遠からず、現に獨逸が好適例で、言葉巧みに宣戰の口實を粉飾しても、根本の精神が本統でないから、増長と野心とに唆かされた歐洲大戰亂が、遂に世界中に其の慘害を及ぼすことゝなつたのである。故に上人は安國論に於て、法と國との妙關係に着眼せられ、我が建國の根本精神に鑑み、前に掲げた「夫れ國は法に依つて昌へ……」云々の明快なる宣言となり、難易抄には……

佛法の如く世間の如く影の如し

「佛法やうやく顛倒しければ、世間亦濁亂せり。佛法は體の如く、世間は影の如し。體曲れば影斜めなり」……

と云ふ千古不磨の大眞理を道破せられ、其の個人たると、一家たると國家たることを問はず、道義信念の上に、其の基礎を定めてこそ、品性も高まり、一家も榮へ、國家の尊嚴も成り立つので、此の根底を缺如した國家人生は、恰かも砂上の樓閣と等しく、平時事なき間は左程にも思はぬが一朝天下國家の大事が持ち上つた秋には、一溜りもなく、顛覆倒壊の災厄に遭はねばならぬ。

此の如き我建國の根本皇道の精神たる、正義の内容を明かにし、佛法の中心法華經の生命たる、正法の意義を詳らかにして、神武天皇の「正建國」に對して「立正安國」の四字を配し、整然たる大組織の下に、純日本的宗教を創造されたのが、即ち日蓮主義で、殊更に日蓮宗と云ふ從來の唱

法華經の根本教義の感化

へを措いて、日蓮主義と號するのは、斯かる深遠なる、日本の宗教の眞意が今迄充分明かにせられて居なかつた爲である。然るに、法華經の根本教義が「開顯統一」の四字に結歸せられる所より、何は措いても、我が國體の内容を開顯して、國民をして、廣大深遠なる國體的信念に歸一安住せしめ、之を土臺として、國民とし及び個人としての一切の行動を整理按排し行くことの出来る、底力のある宗教的感化を主眼とするの意味を以て、純日本の宗教——日蓮主義——と名けるのである。

十七憲法の勅諭

法華經の「開顯統一」の眞理を、巧みに國家統治の上に活用し、日本の佛法の開祖となり、古來地方的に發達し來れる、分權制を革めて、中央集權國家統一の基礎を固め、社會百般の制度文物を革新して、日本文明の指導者となり、明治天皇の勅諭(通稱教育勅語)に相當する、有名なる十七憲法を治定し、其の第一條に「和を以て貴しと爲す」と云ふ、國民道德の基

我國體の宗教的意義のありや

本觀念を明了にし、其第二條に「篤く三寶を敬へ」と、更に「和を來すの根本は、三寶興立の佛教的信仰に在ること」を明知せしめ、先づ法華經の註釋に筆を染めて、以て鎮護國家の寶典と爲し給ひしが如き、又 明治天皇王政維新の初めに、五箇條の誓文を公布し給ふや「天地神明に誓ひ」と宣まひ、勅諭の冒頭には「我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なり」と宣言せられしに見ても察せらるゝ通り、我が國體の淵源が、嚴として天地自然の道義と、法界眞理の大信念に存することは争ふ可らざる事實である。

然るに、我國の現状を観察するに、政府當局者は只管政權の咬りつきに浮身をやつし、政治家は國利を忘れて黨益を事とし、教育家亦火災に臨んで眞影を奉移するを忘れざれ共も、勅諭に對する國民的信念の涵養は他所事の様に思ひ、其他文藝の士、操觚の輩に至るまで、我が建國の

本義國體の神秘性を解し、且つ信ずる者は、殆んど曉天の星も曇らなざる状態にて、唯々有形の物質的文明を進むるに餘念なく、道義的觀念の修養向上は愚か、無宗教無信仰が、文明紳士の第一資格たるが如くに思ひなせる不健全なる思想の滔々として濁浪を揚げつゝあるは、實に憂ふべきの極で、彼等が道義信念の精神的根底なくして、修身齊家治國平天下の實を擧げんとするは、實に足代なくして塔を築かんとするの愚にも増したる、みじめさではあるまいか。故に曰く「佛法は體の如く世間には影の如し、體曲がれば影なまなり」と。鎌倉當時の日本國民が、上は智識階級の僧侶武士より、下は長人百姓に至るまで、誰一人として、北條氏の日本國體に對する、非國民的振舞を咎め怪しむものゝなきまでに、多年誤まり傳へられた邪法邪宗に因て、心の體の曲れるが爲に、其の影たる世間の有様が、天變地天に次ぐに饑饉疫癘を以てすと云ふ風に、人心

恟々として瞬時も枕を高ふすることの出来なかつたのも無理ではない。安國論は、先づ以て事實上の日本國民の代表者たる、北條執權に向つて、彼自からの反國體的の曲れる性根を矯め直すべく、短刀直入に本陣に斬り込んだのである。

然り而して現時日本上下の思想界が、紛然雜然として、徒らに冷かなる權利義務の法律論に没頭没入し、毫も暖かき道義信念の涵養を思はず。往々にして國體違反の言論行動となり、非國民的無耻の徒輩の横行を見るは、是れ正に思想上に於ける北條時代を現出して居るので、安國論の主張は、今も尙ほ侃々として、吾々大正國民の耳膜に響いて居るのである。

十 安國論に表はれたる二大主張

(其二) 世界統一の天職に對する警告

「天に二日なく國に二王なし」と云ふ法華經の大義名分、開顯統一の活ける信念によつて、先づ日本國體の神聖を回復せよとの警告は、内面的反省の復古運動と見へるが、こは決して復古の爲の復古即ち退却的復古ではなくて、寧ろ前進的復古であつた。即ち理想的大日本は、外、世界に向つて遂行せねばならぬ、我國特有の天職が在る爲め、日本の佛法は之を國民一同の頭に泌み込ませ、法華の正法に叶つた信念の威力と、天成不思議の國體の靈の力と相待つて、此の使命を實行せねばならぬ。此の責任が盡くせぬ様では、世界に於ける帝國の存在は全く無意義と言はれても仕方がない。成程責任を果たすと云ふことは、苦しくも又辛い

には相違ないが、又非常に愉快である。特に我のみに其全權を委任せられたと云ふ場合に、其の光榮は更に大きく且つ難有く感受せられるので、此の責任の自覺が、單に冷かな認識と云ふに止まらずして、一個の熱力ある信念信仰となると、其の偽りのない眞面目なる一片の誠心は、冥々の裡に「佛所護念」と云ふ絶對實在の感應を喚び起して、超人的の勇氣や、力が、泉の如くに湧き出づる様になる。而して此の力が、即ち人を救い世を濟ふのである。

然るに、翻つて從來の宗教の有様を見ると、自力と他力の區別、現世と未來との異は有つたけれども、要するに、單なる個人の安心立命を主として信仰を教へたもので、八宗九宗と店を並べて賣り出した品々は、孰れも印度の直輸入か、否らざれば支那朝鮮で多少の加工をした、翻譯佛教で馬丁が麻上下を着けた様に、何處となく生硬で、兀々で、日本と云ふ

身體に似つかなつた。花の様に華美なる現世主義の生活より外に何物をも望まず「櫻かざして今日も暮しつ」と云ふ様な平安朝に、眞言宗の持て囃されたのも、何事にまれ直截簡明を貴ぶ鎌倉時代の武家全盛期に方つて、禪宗の流行したのも、皆是れ一時的應病與藥の教法で、洪大なる佛教の應用としては、夫々特殊の方面を發揮したもので、決して佛法を外にしたものではないが、まだ日本の國體とか、我が國民性とか、建國の精神とか云ふ根本問題に觸れ、渾和融合して純日本の宗教となり、活ける日本國民一人々々の血となり魂となるまでには到らなかつた。丁度今日の基督教が「世界的宗教」と云ふ一枚看板で、日本に這入つて來たはよかつたが、飽く迄も世界教として押し通す譯にも行かず、去りて日本的宗教として、全然我が國體國情に融合同化する事も出ず、世界と國家との中間に板狭みの苦境に陥つて、進退これ谷まり、辛ふじて「神」の一

字に無理遣に、契合點否迎合點を見出した積りで、吻と一息ついたが、不自然極まる小刀細工の痕跡は、歴々として隠すことは出來ない。小崎某と云ふ基督教の一大家が「國家と宗教」の中に……

「吾人は我が國體と基督教との間には、自然に其の聯絡が成立つて居ることを疑はない。何となれば、我國の神々は、つまり天地宇宙の主宰たる、獨一の神を指す者であつて、決して他に神あるを云ふのではない。されば我國が神國であつて、其の皇室が天孫であり、其の國體が特別である」と云ふ事は、宗教的に之を見る時は、決して吾人の信仰と衝突すべき者ではない。唯吾人は我國ばかりが、神國であり、又我皇室のみが天孫であるのでなく、何れの皇帝も何れの國王も天孫であらざるはない。尙ほ弘く之を云ふ時は、天下萬民は悉く天孫ならざるはない。然れども同じく天孫でも、其の使命は人々に依つて異つて居る。我

單なる世
界主義に
一種の危
険思想な
り

「世界」の
に字に四
信はれた迷

日人の道徳に
あつては餘り
あり

は、居ないか。國民的宗教道徳が、何故に世界的宗教や道徳より低
くいか。國民的と云へば狭いもの、小さいもの、低いもの、價値のないもの
世界的と云へば、廣いもの、大きいもの、高いもの、價値のあるものと云ふ
様に、廣狹、大小の概念を初めより矛盾の關係に立たしめ、互ひに相ひ對
立して居るものと獨斷して掛つた誤りで、恰もスペンサーの「國家對個
人」の議論と同じく、之を矛盾概念と見た眼の方に過ちがあるので、他の
國民道徳はいざ知らず、日本の國民道徳は、決して世界道徳たる人道と
相ひ容れぬ様な淺薄狹隘なものでないことは、喋々を要するまでもな
く、勅教中の「博愛衆に及ぼし」の一句で澤山であつて、道義を根本とせる
國民教育の基準と、其の歸着を明示せられた勅教が、獨り小さな國內に
けに通用する、昔の藩札の様なもので、一足も他國には踏み出せぬと云
ふ底のものであつたならば、まさか之を古今に通じて謬らず、之を中外

特別なる
道徳は又
持てゐる
に依る維

に施して悖らずとは御せられぬ筈である。「斯道」と宣ひし我固有の道徳
中には、優に人道を容れて餘りあるのみならず、論者の所謂「我國體の特
別なる」譯は、必竟この特別なる道徳と宗教に依つて、擁護せられ哺翼せ
られつゝあつた爲で、之を科學哲學等と十把一束にして、世界的になら
ねばならぬと云ふのは、つまり國體の特色を打破するも、差問なしと云
ふのと同じ結論となり、切角國體の特別性を認めたのが無駄になるで
はないか。極言すれば、是れ蓋し我國體の特別性が、本統に呑込めて居な
いからではあるまいかと、疑はざるを得ないのである。「學問に國境なし」
の格で、我國の佛教殊に日蓮主義を評して、佛教の墮落である、縮小退歩
である、抔と評するのも、論者と同一平面にある近眼者流で、實に情けな
く感ずる次第である。有名なる海老名某が、日米問題の唯一平易なる解
決法は、唯日本が基督教國となり、世界教を奉ずれば足れりと公言した

と云ふのも、同型の病的思想に外ならぬ。斯る眼光を以て我日蓮主義の強烈なる國體觀念を評して、國家主義に囚はれたる宗教、寧ろ佛教の墮落なりと放言して他の一面に偉大なる世界主義的思想の包含されつゝあるのを知らないのは誠に残念に存する。いでや安國論の一節を假りて、其の一端を示すであらう……

「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに實乗の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆佛國なり。佛國其れ衰へんや。十方悉く寶土なり。寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく、土に破壊なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん。此の詞此の言信すべく崇む可し」

是ぞ所謂日蓮主義に於ける、世界平和の大思想で「安國論」の一面は、勿論日本國體復古の警告であるが、之と同時に他の一面に於ては、日本國體が眞個に國體的自覺の眼を開いて、帝國の使命の偉大なる責任を感

じ。茲に世界に向つて、大活動を開始するに至つて、全世界的平和と云ふ結果を獲るので、斯の如き廣大なる世界教化運動も、其出發點は、先づ順序として之を日本國民の國體的反省に待たねばならぬ。汝早く信仰の寸心を改めて速に實乗の一善に歸せよの「汝」とは、直接北條執權を指したのであるが、同時に日本國民全體に向つての警告である。此の寸心を改めて「心遂に醒悟す」との經文を實現する曉には、之が原因となつて、三界佛國、十方寶土と云ふ、國家人生最後の理想郷たり天國樂園たる、世界的大平和の結果を齎らす譯で、茲に至つて我等の住める國土を始め、身も心も眞の大平和に住することが出來て「國に衰微なく、土に破壊なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定、安心決定」となるのである。法華經の中には「我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」と云ふのが即ちそれである。順序上から云へば個人は起點で世界は其の終點である

が、眞に世界に向つて實効を擧げて行くのは、個人と世界との中間に跨がつて居る地上の勢力たる國家に待たねば駄目である。一概に世界的世界的と唱へて、國家的とか國民的とか言へば、つまらぬ様に思ふのは大變な誤りと言はねばならぬ。國家の外何物をも見ない、偏狭固陋なる國家至上主義は、日蓮主義ならざるも、少し理屈の解る者ならば、何人も之を賛成するものはあるまい。日蓮主義は、前にも言ふ通り、法華經の「開顯統一」の眞理に据つて居る以上、國家を無視した世界主義や世界を除外した國家主義に片寄る氣支はないので、返す／＼も日本國民たるものは、世界的大理想を以て建國せられたる我日本の國體を諦かに會得し、此の深秘なる國體の靈力を通ふして、個人及び世界の眞意義を開顯し行かねばならぬ。

世間普通の宗教とか、教とか云ふものは、概して心の持ち様、精神の修

め方と云ふことのみに重きを置き、精神の方面ばかりを、力説し誇張する傾があり、動ともすれば物心二元論に陥つて、心と身體とは別々で、心さへ清淨に持てば、身體はどうでもよい。此の身さへ安全であれば、世の中が曲がらうが、轉がらうが、頓着する所でない云ふ風になり、中には肉と靈とを極端に對立せしめて、信仰と云ひ宗教と云ふは、つまり肉の束縛より靈魂を解放して、清き神のお側に行くことであり、従つて外界世間を始めから惡るいものと極めて、之と戦ひ之を征服して、一步々々を占めつゝ行くことが、信仰的生活であると教へるものである様だが、是はまことに幼稚な宗教思想で、身心相關の妙理も解らず、個人と社會自分と世間との妙關係も呑み込めて居ないのである。日蓮主義から言へば、如何に精神の修養に志し、心を平和にと努めても、其心を包んで居る身體が危険な地に立ち、不安の場所に居つたのでは、到底心の平和は

大正の青年と日蓮主義
一四六
望めない。假令身體の平安を冀がふても、之を置く國土其物が平安でなかつたならば、其の身の安全も得られない。假令又國土の安泰を祈つても隣邦否世界全土が安穩でなかつたならば、國土の安全は得られない

斯の如く、段々順を逐ふて考へて來ると、精神と身體と、國家と世界との間に、切つても切れぬ深い關係の存する譯柄が呑み込めて來るから、正義を中核とし、世界を理想して建國せられた大日本帝國が、現に此處に立つて居る以上は、當然之が中心となり、指導者開道者となつて四海歸一の大理理たる妙法五字の正義を光揚して世界の救済に努力せねばならぬ。自己と世界身と心とを何時までも二元的對立的に考へて居る様では、到底實大乘の佛法を味はふ譯には行かぬ。法華經には「今此の三界は皆是れ我が有なり。其の中の衆生(衆生とは動物界植物界礦

物界の一切を指す)は悉く是れ吾か子なり」と云ふ大宣言がある位で、此世界どころではない、三界は皆是れ自分の身體で「一切衆生の異の苦を受くるは悉く日蓮一人の苦なり」との大慈の絶叫びも、同一の信念から迸しり出た中心の聲である。成程世界平和と云ふことは、管に日蓮主義ばかりでなく、佛教中の各宗派でも、乃至基督教でも萬更教への譯ではないが、日蓮主義は、徒らに誇大妄想の養成を事として、能事了れりと言ふのでないので、之を理想し之を信する自己が、其の時其の場から之を一々實行に表はして行くので、之を「法華身讀——法華色讀」等と唱へて、要するに此の身を以て法華の真理々想を實踐躬行するとの義に外ならぬ。斯くて一刻くと世界大に自己を擴大しつゝ行く「勇猛精進」の努力の一步に、無限の價值、無盡の悦びを感得しつゝ、活きて行くのを日蓮主義の信仰生活と云ふので「苦をば苦と悟り、樂をば樂とひらき、苦

樂ともに思ひ合せて、南無妙法蓮華經と打ち唱へ居させ給ふべし」との訓戒は、則ち此の意に外ならぬと信じて居る。

是に於てか知るべし。立正と云ひ安國と云ふは、決して日本一國に限られたに問題にならずして、實に世界の問題であるので、唯だ其の世界平和の中心たり、起點たるべき神聖偉大なる天職を有するのが、我日本國であつて、精神的道義的世界統一の理想は、法華の教義であるけれども、國家と云ふ一大地上の勢力を以て、之を實現するものがなかつたならば、釋尊は唯だ虚言妄語の佛、空理想を説法したまで、要するに一場の夢物語に過ぎぬことゝなつてしまふ。然るに之を實現し勵行し得る神聖なる國家が、此の大理想に應じて、現實の地上に打ち建てられて居つたのが、即ち我日本國であつた。自覺せられた聖日蓮は「就中、日蓮生を此の土に得たり、豈我が國を思はざらんや」と。世界は廣く國も多き

眞の國
心も大
自覺し
信念より
發するなり

其が中に、特に日本と限つて生れ來つた無上の光榮と歡喜とに感涙深の如しと、打ち喜ばれたのも無理はない事だ。法華の神髓は、日本國を待つて始つて其の光を放つことを得るので、道義的世界統一の爲めに建國された日本がなかつたならば、世界眞平和の福音を傳へた眞佛法の結論は、永久につかないことになるのである。此の「法」と「國」との冥合めいごうについては再び後に詳論する。

一一 日蓮主義の日本國觀

全體佛教は、基督教始めはユダヤの民族的宗教であつたが、基督以後ポーロを経て世界的となつた)と同じ様に、世界的宗教で、従つて佛教經典を始めとして各宗の祖師の手に成つた著書等にも、佛教普通慣用の「娑婆」とか「法界」とか「三界」とか、乃至「三千大千世界」と云ふ様な、世界的の言

聖日蓮の
文書に日蓮の
本なる日本
文字の多き
字の何の光
ぞは

葉が多くて、其の指す所は、誠に遼漠たる概念に過ぎずと思はれるのも尤な次第である。然るに聖日蓮の遺文五百篇を通覧して見るに「日本」「日本國」等の文字の見へない文書は、殆んど無いと言ふても差支ない程、盛んに用ゐられて居つて、鎌倉時代に輩出せられた法然、親鸞、道元等各高僧の文書と、聖日蓮の文書とを比較對照して、殊更不思議に感ぜられる點であつて、寢ねて寤ても「日本」「日本」と連呼し、或は狂氣の沙汰ではあるまいかと、門外漢をして怪訝の念に堪へざらしめる位で、氣早な者は、之を以て直ちに上人が、大愛國者大忠臣であつた證據だとさへ言ひなすが、果して其通であるか何うか。苟くも上人の國家觀を充分に了解せんとするものは、一應此の「日本觀」に眼を透して置かねばならぬ。

専門家の説に依ると、御遺文全篇を通じて「日本國」と云ふ語の使ひ方は自から二様になつて居つて……

狹義の日本
本國の日本
國義の日本

(第一)は單獨に具體的狹義の日本として、地理學的區分の上から言ふ所の我國で、例せば……

「日本國中上下萬人悉く生取に成るべし」……十一通御書

「日本國一人もなく天台宗に歸伏し、南都東寺日本一州の山寺、皆叡山の末寺となりぬ」……開目抄

「三類の強敵必ず日本國にあるべし、當世日本國に三類の法華經の敵人なかるべしや」……同抄

「當世日本第一の持戒僧良觀上人日蓮を訴ふ」……行敏訴狀

「日本國にそこばく持あつかひて候身を、九年まで御歸依候ぬる御志申すばかりなく候」……波木井殿御書

等で、其の他類例は枚擧するに堪へぬ。次に……

(第二)は單獨でなく、統一的理想的廣義の上から觀た日本國で、例せば

「扶桑國をば日本國と申す、豈聖人出で給はざらんや——日は東より西へ入る。日本國の佛法月氏へ還るべき端相なり」……諫曉八幡抄
 「日本乃至漢土月氏、一閻浮提、人毎に、有智無智をきはらず、一同に他事をすて、南無妙蓮華經と唱ふべし」……報恩抄
 「日本國は耆闍崛山なり——此の山を壽量品には本有の靈山と説かれたり。本有の靈山とは此の娑婆世界なり。中にも日本國なり」……
 ……日向記
 「壽量品流布の國土は日本國なり——世界とは日本國なり」……御義口傳

先づ類例は此邊で止めて置いて、偕て聖日蓮の「日本國」「日本國」と力説せられた本旨はと言ふと、勿論第二の方の意義で、法華の極理に依て、開顯

法の眞實なるを合
 期とするを
 日蓮主義
 は世界平
 和宗とす
 名は宗と
 和宗とす
 名は宗と

せられた神聖日本國は正に世界大平和の福音を宣傳すべき天職を負へる國家で、法華の正法は、日本國家の形體上の威力に依て世界人類に光被せられ、日本國家は、法華正義の法力に養護せられつゝ、茲に法と國とは微妙なる化學的抱合一致の姿となり、精神的には世界平和宗とも云ふべき、大宗教の本尊と信仰とが統一せられ、形體的には、世界一家、萬國一王の寂光淨土を實現すべき、廣大なる天業運動の中心起點として、法華經と日本國、釋尊と天祖大神、形益と聲益との靈的關係の、先天的に成立しありし事を自覺せられたる上人が、狂氣の如くに「日本々々」と連呼して、迫害を怖れず、權威に臆せず、寧ろ樂つて白刃を迎へ、水火の中に飛び込みつゝ、立正安國論の献策となり、開目抄の選述となり、本尊抄三秘抄等の大著述となつたのである。

「鳥は啼けども涙なし日蓮は泣かねども涙の乾く暇なし」……

實にや、事實上の日本の國主さへ區々たる一家一門の榮華の夢に魂を奪はれ、日本國家の神聖、理想の大日本の意義なぞ、怪俄にも思ひ浮ぶべくもあらず。況んや滔々たる滿天下の盲目人民に於ておや、聖日蓮が彼に向つて「立正」と呼び、此に對して「開目」と疾呼せられしの眞意を思ひ見れば、我知らず五體に震慄を覺へるではないか。

普通の「日本國」と云ふ文字さへ、古來各宗の祖師には見當らぬ位であるから、況してや、世界に對する、靈的天職、と云ふ様な深大なる意味を寓して「大日本」と公然稱へ出せし者は、宗教家は固より、世間の學者政治家等にも、其の例を見ないのである。尤も古い所では古事記の中に——懿德天皇の事を大倭日子鉦友命と記し、下つて日本書記は之を大日本彦耜友天皇と書き改め、日本歴史上始めて「大日本」と云ふ文字を用ひてゐるが、是は唯「大倭」に對して「大日本」を當てはめたに過ぎないので、「大」は賞

歴史上に於ては、大日本に於ける靈的意義

美の詞に過ぎない。「日本」でも「大日本」でも別段變つた深い意味はなく、單に「我國」——極東の「日本」と云ふ稱呼に外ならぬ。但し對外的に「大」の字を看板にして、自己の威嚴を示す場合に、示威的誇張的に用ゆる事があるので、恰かも營利商買の廣告と一般、品物の實際の價值よりも買ひかぶらせようの商略から、九尺二間の裏店同様の小さな床屋の店先にも「大日本理髮協會」とか何とか云ふ様な風に、大日本何々會とか、何々組合とか、數へ立てたならば、随分滑稽なのや、無邪氣なものもあらうと思ふが、是等は深く咎むるにも足らぬ。然るに、聖日蓮の「日本國」の意味は、多くは前に擧げた第二の理想的帝國の意味に用ゐられ、就中、彼の鎌倉時代最大の事變否日本歴史中前代未聞の大國難たる元寇襲來——弘安の役より少しく遡り、即ち六月十六日附の御筆で「小蒙古御書」を認めて一般門中へ嚴達された有名な御遺文の中には、殊更に「大日本國」と特筆大書し

「大日本」の「大」の字に「大」の字を絶對に對するを以て、人類平和の意義——世界八萬の國にも超へたるいみじき國體を以て、人類平和、世界淨土建設の天業を完ふすべき大帝國なること。従つて日本全國民は、斯る神聖無比の天業實現に對して、之に参加し貢獻するの光榮を有する大國民なることを、自覺せしむべく、法華の開顯統一の極理を、直ちに現實國家民生の上に活かして、佛使の天職を遂行せられたのであつた。有名な「小蒙古御書」とは……

小蒙古と大日本とをラスト

て、千載一遇とも云ふべき國家の最大事變に、全國民の精神状態が眞面目に立ち還つて居るのを機として、特別に「大」の一字に、帝國の絶對神聖の意義——世界八萬の國にも超へたるいみじき國體を以て、人類平和、世界淨土建設の天業を完ふすべき大帝國なること。従つて日本全國民は、斯る神聖無比の天業實現に對して、之に参加し貢獻するの光榮を有する大國民なることを、自覺せしむべく、法華の開顯統一の極理を、直ちに現實國家民生の上に活かして、佛使の天職を遂行せられたのであつた。有名な「小蒙古御書」とは……

『小蒙古の人、大日本に寄せ來るの事、我門弟並に檀那等の中に若は他人に向ひ將又自から言語に及ぶべからず。若し此の旨に違背せば、門弟を離すべき等の由、存知せしむる所なり。此の旨を以て、人々に示すべく候也——人々御中』……

と云ふので、最初文應元年七月十六日に安國論を奏進して以來、三度の「國家諫曉」を強行されたが、大聲は遂に俚耳に入らずの譬の如く、馬の耳に念佛程の効果もない。所が文應より指折り數へて九ヶ年目に當り、文永五年正月となつて、いよいよ「蒙古國」より牒狀が到來したので、上人は隙さず北條彌源太に與ふる書を手始めに、鎌倉切つての名山大寺の高僧智識に十一通の御書を飛ばして、一段の警告を與へられたが、矢張り上人の言には耳を借さぬ。然るに文永も過ぎ、弘安も四年の六月となつて「蒙古來」の聲、津々浦々までも警鐘の如くに響き渡るや、上下の人心恟々として荒れたる海の如くで、殆んど爲すべき所を知らぬと云ふ有様になつたので、上人は此處ぞと、此書をもものして、門弟等の中に、ソレ見よ、我が御日蓮の豫言は斯くまでに適中せるにあらずやと、他に向つて高慢の鼻を高め、徒らに世間に吹聴するが如き不心得なき様と、嚴重に

して、驚死せしむるに足る大文字で、日蓮は教主釋尊の御使なれば、天照太神、正八幡も頭を下げ手を合せ給ふべく、若し吾が言を用ひずんば、日本國必ず亡びるであらうと云ふが如き、日蓮そも何の權威あつて、此の大膽不敵の斷言をなしたのであるか。到底道學者流の解し能はぬ所であらう。併し是れ決して怪しむに足らぬ事で、三界は悉く教主釋尊の領分で、日本も亦、其の國土、神明、國民、共に其の支配の下にあるべきものである。然るに其の爲す所、釋尊の本意に適はず、眞理に背く以上は、靈山の佛勅を畏みて、本化上行菩薩の再誕として、佛使たるの天職を行ひ、其の國土と民衆とを併せて、之を懲しめ「國必ず亡ぶべし」と斷言せしは、素より當然の事であつて、天照八幡の如き國神が「頭を傾け手を合せ、地に伏し給ふ」も亦毫も怪しむに足らぬ……と云ふのが、大體の趣意で、高山氏の所謂「大日本」は現實の國家を超越せる、眞理界の理想郷、プラトンの理

想國の様なもので、従つての一小國家たる日本の天照八幡等の神明は、梵釋四天に比すれば物の敷ではない、三界の本主たる釋尊の御使に對して、手を合せ地に伏すは、尤の事であるとして、超國家的の大信心に、聖日蓮の偉大を認めんとするのである。

之に對して、小笠原長生氏は、普通日蓮主義の研究に於て、人格日蓮と靈格日蓮と云ふ様に、對立的の二種の人格を認めて、非常に日本を賞揚し、忠君愛國家たる觀ある場合と、極力日本を罵倒して、法華謗法の惡國と爲し、蒙古の襲來は、寧ろ當然の神罰であると、飽く迄も超國家的の觀ある場合との矛盾を疏通せんとするの態度に服せずして、人格たる靈格たるを問はず、飽くまでも日本々位なのが上人の眞面目で、又それが本化上行の再誕たる證明ともなるのである。即ち人格としての上人が、我れこそ上行の再誕なりと自覺せられた時には、人格即靈格たる

べきもので、之を二つ別々にして見てゐることは出来ない。人格と靈格とに別けるのは、單に説明の便宜上の話で、實には一體なのである。假りに上人より全く日本國民たる資格を取りのけ、單に再誕せる上行菩薩と見るも、釋尊より受けたる使命上、絶對に日本の國體を擁護せねばならぬと考へて居られたと云ふ理由が、儼として存して居るのである。上人に「人格」と「靈格」との二方面があるならば、日本にも「區域的」と「靈國的」の二方面があると觀なければならぬ。「此の國の亡びんと疑ひ無かるべけれども、且らく禁をして……」と云ふ前に引かれたお言葉などは、即ち靈格日蓮として、區域的の日本を觀た場合で、更に進んで靈格日蓮として、靈國的の日本を觀た場合には、國も靈人も靈で、唯一靈法たる法華經の意義も斯くてこそ始めて光顯せらるべく、此處に至ると、國と法とは「靈」の一字に融合せられたる、不二の妙體と觀せられて居る。此の法國不二の一大

靈氣こそ、當に進んで宇宙を統一的に靈化し、退ては世界道義の中心たるべきものであつて、上行たる我れが、日本臣民たるは、此の靈氣を以て全人類を救ふべき、大使命を帯べることを、啓發せんが爲なりと確信せられ、「法華經にて靈山と説かれたるは日本國なり」と、世界を以て、日本帝國に修束し來つて、「日蓮は日本國の魂」即法華經の魂で又實に世界の魂であるとの大抱負なのである。此點を能く了解して後、翻つて日本國に對する罵倒の言、咀ひの語を味はへば、是等は、畢竟鎌倉當時に於ける變相的邪惡を一掃して、本來の面目たる眞の國相を現はさんが爲めであつた事がわかるであらう。されば上人を超國家的と言ふのは、一應上人を偉大視するやうであつて、實は却つて凡人視することになるのであらう……と評論されて居るのは、最もな説だと考へる。又佐藤鐵太郎氏は……蒙古襲來の事は國家の一大事である。併し我が佛法が日本

より世界に光被すべきこと明白なる以上、譬へば灸治に病を癒すが如く、假令一時は亡國に瀕するとも、我が國の天職さへ明かになる以上は、必ず後の悦びとなるであらうと、信じて居られたことは明白で決して日本の亡ぶることを欣んだと云ふ譯ではない。北條氏は頑迷にして諫めを用ひず。國民は容易に迷夢より醒めず。而も國難は佛の豫言の如く日に月に切迫しつゝあるが、蒙古を調伏するもの日蓮一人を措て外にはない。文永十一年壹岐對島を荒された一ヶ月後に、南條七郎次郎に遣はされた消息中「抑も日蓮は、日本國を助けんと深く思へども、日本國の上下萬人一同に、國の亡ぶべき故にや用ゐられざる上、度々仇を爲す。されば力及ばず山林に交り候。又大蒙古國より寄せられ候と申せば、當時の壹岐對島の様にやらせ給はんことを思ひやり候へば涙も留まらず」等のお言葉で、蒙古に對する上人の真情が分るのである。……又「小蒙古」

「大日本」の對照は、實に上人の大なる叫びで、是迄は人を訓へんが爲めに蒙古襲來の豫言を以て人心を正直に導かんとして、時に危矯の言を發し、我が日本國を罵られたこともあるが、今や事實として、蒙古襲來の舉を見るに至つたので、上人の本領が昭然として發揮せられたのである。平生は大蒙古とか、僅か小島の主など、仰せられて居つたが、我が日本の天職を感得せられた日蓮上人は、常に偉大なる日本を認めて居られるのであるから、是に於てか、大なる蒙古を小蒙古と云ひ、小なる日本を大日本と明言するに至つたので、ありふれた平凡の國家は大なりとも大とするに足らぬ。漢土月氏にも優れたるを明言せられつゝある上人は、實に常住不滅、一人救護の大意義を體顯すべき我が日本國の偉大なるを信じて居られたのである。……彼の高山氏が「日蓮上人の眞意は、法華經に協はぬ國家たる日本は重んずるに足らぬと云ふのであつて

先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべしなど言はれしは、義理一遍の言葉に過ぎぬと云ふのは誤解で、我日本は法華經に協はぬ處ではなく、法華經の眞意を傳へるのは我が日本國の外にはない。我が日本國の御國體は、既に法華經自身である。北條氏などの政治を執つて居るのは、恰も悪い番頭が一時威張つて主人顔をして居るやうなもので、日本の大黒柱は、依然として法華經を體現して居ると悟つて居られた以上は、日本を重んずるに足らぬなどと考へられる筈はない。故人を悪く言ひたくはないが、高山氏は法華經と日蓮上人に就ては研究したであらうが、惜しい哉、まだ日本の御國體を知らないのであつた……と論せられ、一旦法華經の眞髓の發揮せらるべき、唯一の國家として、日本を開顯し來つたる上人が、僅かに國體上の一雲霧に過ぎざる、鎌倉當時の一次的變調の爲めに、將來の日本までを一括して、丸で紙屑屋が古道具に値をつけ

清水梁山の法華經の眞意に依る日本即靈實

るかなんぞの様に、二東三文に踏み倒して、惜しいとも何とも思はぬと言ふのでは、是れ自から自からを侮辱する譯で、肝心の最初の自覺までも、打ち碎す結果になるではないか。

清水梁山師は更に明確に之を評して……聖日蓮の眼底に映じたるものには、尙ほ此の小日本ならざる大日本國があり、小神明ならざる大神明たる天照八幡があるので、而かも其の大日本國なるものは、高山氏の所謂超國家的大理想なる眞理界に非ずして、純乎たる歴史上の事實としての大日本國である。即ち日本は、建國の初めより、其義已に全く大日本國なるものであつて、聖日蓮は、深く此の建國の體義を領會したるものである……との説で、其他一々擧げるまでもなく、各學者の意見が、上人の主張は決して超國家主義でなく、飽く迄も日本國家主義であると云ふこと、及び其の國家主義は、通途の排外的の偏狭な國家至上主義

「天國は近けり、爾等悔ひ改めよ」と、平和人道の一手販賣者かの如く假裝しつゝありし彼等の假面一時に剝落て、狼の空念佛であつた事が曝露した今日となつては、吾々は物質的文化の皮相に依つて飾られつゝありし彼の國が、精神的文化の内容に於て、案外貧弱であつた事に愛憎をつかすよりも、寧ろ之を氣の毒に思ふと同時に、大日本帝國の彼等に對する責任、日蓮主義者の世界に對する責務の一層重大なることを熟慮し、別して大正の青年の大に自重自愛せんことを熱望するの至情に堪へぬ。

斯の如く考へて來ると「小蒙古」「大日本」の對照に於て、大小の關係を量的と見ずして、之を性質的に見て、精神的國家存立の道義的價値の大と斷じたのは、一應の解釋であつて、大日本の「大」は、實は絶對の義を表はす大で、小に對する大でなく、絶對唯一の靈國たる意義が自から明了

名利我慾
の爲めに
一兵を
動すに
も動さ
ずを許さ

「大」の
字の神祕

なるであらう。蓋し法華の妙理は、娑婆世界を透ふして眞實淨土の實相を觀印度出現の人格としての釋尊の現身に直ちに久遠實成の絶對本佛を感得せしむる點にあるが故に、假りに大小と云ふ相對的關係を立しながら、實は其の「大」の裡に「唯一絶對」の義を含め、あることを看破せなければならぬ。彼の上野時光に宛てたる有名なる御書「神國王書」中の

「然るに我が日本國は、一閻浮提の内、月氏漢土にも勝ぐれ、八萬の國にも超えたる國ぞかし」……

の堂々たる宣言は、實に意味深く拜されるので、眞に國體々義の自得より進しり出でたる、日本魂其もの、叫びである。地理學的に區劃せられたる日本は、粟散國の小島其まゝ、法界大の天國であり、之を知し召さるゝ我天皇は、其儘天來の統治者即ち天君で在らせられ、吾々臣民は此の儘天壤無窮の皇運を扶翼し奉るべく運命づけられたる天民である。

大日本の
所以の
何ぞの
や

されば我が大日本の大日本たる所以は常に公道正義を以て高く天下萬邦に臨み、其の兵力と富力とは、一に此の正義公道を擁護せんが爲めであつて、彼の名をば平和の爲めの軍備に借りて、實は武力を肆まゝにせん爲めの軍備であつたと、化の皮の剥げる様な虚偽の平和論者や、口には蜜の如き博愛の福音を説きつゝ、腹に黄白の人種的偏見の鐵壁を築き、異邦人を見ること蛇蝎よりも太だしき、似而非宗教等を監視して、人をして、其の毒手に罹らしめざると共に全世界をして、我が富力を増殖し、軍備を擴張するの真意の存する所を周知せしめ、色眼鏡を以て我に野心ありとの誤解を起さしめぬ様、國民全體が周到なる注意を以て外交の事に當つて行かねばならぬ。

然るに、翻つて、遠く海外に在る日本國民の行動を觀察するに、吾々内地に在るものよりも、一層帝國の本領を發揮すべく重大なる責任ある

排教宗教的
現成に人
の代國を
無信を
憐れめ

狂氣と呼
ばるるは
吾人の光
榮なり

にも拘らず、却つて排日的空氣を濃厚ならしめ、時に我をして軍事行動を餘儀なくせしむるの嫌さへ之なき有様で、朝鮮の同化は固より、少くとも東洋の平和に向つて、共働提携の責任を分たざる可らざる中華民國啓愛の實に於ては、迥かに米國人の下風を仰ぎ、「日支親善」の名を聞くこと耳にタコを生せし程なるに、其の實蹟として見るべきもの殆んど之なく、日支親善、朝鮮同化の根本的要素たる宗教を見ること、羽毛よりも軽く、滔々たる宗教家亦深く之を遺憾とする兆候も見へぬのは、實に残念千萬な次第で、就中支那布教權の設定さへ今日尙ほ之が實現を見ざるが如き臍甲斐なき有様は、實に座視するに堪えぬのである。吾々日蓮主義者の絶叫が、單に偶然の生活に満足して、何等帝國の使命も、國體の本領をも、解することなき醉生夢死の徒より見て、狂氣の沙汰とも見ゆるのは、寧ろ吾々の光榮とする所で、此の點より言ふも、吾々日蓮主義

者の一段の努力を奮起するの必要あると共に、特に大正青年の眞面目なる反省自覺を促さざるを得ない。

以上陳ぶるが如き、大日本の絶對豊富なる内容と深遠なる意義とは、聖日蓮を待つて開顯されしに相違はないが、本来無いものを外部より附け加へたのではなく、有るものを明瞭にしたのである。決して六百年此方新たに發明したものではない。試みに歳々の新年祭に、伊勢の皇太神宮に奏上せられる祝詞を拜するに……

『皇神の見霽かします四方つ國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄びく極み、白雲の墮居向伏す限り、青海原は棹舵ほさず、舟の艦の至り留る極み、大海原に舟満ち續けて、陸より往く道は荷の緒結ひ堅めて、磐根本の根履さくみて、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立ち續けて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛け

世界の統一は
天業の一人は
獨り大日本
の天業なり

て引寄する事の如く皇神のよさしまつり賜へば……』

之に依つて、我が建國の大抱負大自覺のいかばかり宏大無限であつたか、能く理會せられると思ふ。天祖の「天壤無窮」の神勅は、斯の如き雄大なる皇謀よりの當然の結果で、萬世一系、皇統連綿は、之が事實に顯はれたものである。英米獨佛露の五大強國を始めとして、五大洲何れの處にか、我が大日本國に比すべき、神聖絶對の意味を有する國家が有るか。道義的世界統一の天業は、吾々本有の天國天君天民の避くべからざる天職であつて、何人にも此の光榮を頌つことを許さぬのである。

十二 日蓮主義の國體觀

先づ御遺文の一二を的出して置かう……

「我が日本國は、一閻浮提の内月氏漢土にも勝れ、八萬の國にも超たる

日蓮主義の國體觀

國ぞかし.....神國王書

「夫れ佛法と申すは、勝負を先とし、王法と申すは賞罰を本とせり。故に佛をば世雄と號し、王をば自在と名けたり。中にも天竺をば月氏と云ふ。我國をば日本と申す。一閻浮提八萬の國の中に、大なる國は天竺、小なる國は日本也。名のめでたきは印度第二、扶桑第一也。佛法は月の國より始つて日の國に止るべし。月は西より出でて東に向ひ、日は東より西へ行く事天然のことなり。磁石と鐵と、雷と芭蕉との如し、誰か此の理を破らん.....」 四條抄

人間の歴史あつてより以來、四千年と云ふ短かからざる時間の間に、古くは半獸半人の野蠻未開の遊牧時代より、一家一社會等團體的生活の種々の段階を通過するまゝに、種々の經驗を重ねて、遂に一國家を組織し、之を以て最も強固且つ安全なる社會的生活の基礎となすに到つ

科學は建國に於て
理想を實現する能はる
かに理を明かすに
能はる

たことは、事物進化の順序として當に然るべき事とは思ふが、若し單に吾々の經驗世界——現象の世界に就ての研究者たり説明者たる、科學のみに信頼して、果して満足が得られるであらうか。別けて國家成立の根本精神即ち建國の理想と云ふ様な深遠な問題に關して、果して科學は充分なる説明解釋を與へることが出来るか。どうか。一應の解釋は、つくとも知れぬが、深く堅く之を心の底まで込み込ませて、牢固として、抜く可らざる迄の信念を與へることが出来るか。どうか。.....こは木に縁つて魚を求むると一般、到底不可能の事と言はねばならぬ。何となれば科學の性質としては、普通人間の腦力で説明し得られる位の、手近かな因果の關係に止めをつけ、其より以上の所は、己が分にあらずとして手を着けぬのが本統である。然るに哲學でも、宗教でも、手當り次第に一定の尺度にはめて、有り得べく、又有らねばならぬ因果をも、大抵、獨斷的に

打ち毀はし、否定してしまふのである。現に哲學や宗教は、實生活に縁の遠いもの否縁のなきものとして路傍に委棄して顧みず。近來科學的發明の應用に依つて、著しく日常生活の便利を持ち來した爲に、淺薄にも科學萬能の夢に浮かさるゝ様になり、凡て物事を淺く見て可なりとする風潮に馴らされた結果、大概の事は「偶然」の二字に片付けて一層深く其の由來因縁を究めやうとはせず、萬事に輕跳であり浮薄であることは、概はしき思想界の風潮である。

そこで吾々お互の生存にしても、將た日本國家の存在にしても、十億を以て數へる世界の人類の中で、何故に吾々は日本人として生れて來つたか、日本と云ふ國家はそも如何なる目的を以て建てられた國柄であるか、一向是には頓着せず、只管目前の其日／＼に逐はれて、如何にせば、より美き衣裳を着、より旨き食を喰うことが出来るかと云ふ小我の

日本國家
如何なる
目的を以
て建てら
れたるに
對して

慾に囚はれて、徒らに虛榮の奴隷となつて得々たる有様は、情けなくも亦滲めである。さればこそ、天下民人の等しく歸仰すべき大徳教の經典とも稱すべき 明治天皇の勅教に對して「教育勅語」など、勝手な名前をつけ、元來大きく出來て居るものを、殊更に小さくして、僅かに學校の講堂に敬遠して、單に儀式のお飾りもの、様に、先生も思ひ生徒も心得て敢て怪ます……

『我が皇祖宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり……』と蓄音機的に暗誦はするもの、建國の大理想此處に在りと味識し信得して居るものが、果して幾人あるであらうか。

併し、既往は咎むるも詮なし。今や歐洲戰亂の終末近きに在らんと思はるゝ、世界文明一轉の大切なる時機に臨みつゝある吾々日蓮主義者は先づ大正の青年に向つて、我が建國の精神を説き、我が國體の絶對無

比なる所以を、腹の底から會得して貰はねばならぬ。

前にも一言した通りに、聖日蓮の「立正安國論」に依つて始められた社會的活動の動機が、國體の神聖を回復し、其の尊嚴を、天下萬民に周知せしめねばならぬと云ふ所から起つて居るので、同じ佛教でありながら、上人の宗教が、特に國家的色彩を帯びて見へるのは即ち是が爲であつて、宗教家とは、只釋尊なり基督なりの説き遺されたる教を、口移しに傳道し布教しさへすれば、能事畢れりと早合天して居るが、釋尊は、其の教を弘める者の爲に「隨方毘尼」と言ふて、凡そ宗教の教化は、其の國々の國風民情に適應すべく嚴重な訓誡が垂れられて居る、上人は此の意味を遺文中に述べて……

「彼の國に善かりし法なれば又此の國にも善かるべしと思ふ可からず……」

と云ふ風に、佛教本來の包容主義は、印度に於ては能く婆羅門の教義を包容し、支那にしては孔孟の思想、老莊の哲學を包容し、又能く我が建國の理想精神をも包容して、我が國風及び民情と吻合し調節したのである。上人は斯る佛教の寛容的性質と我國體の特色とを充分に理解し、二者相依の關係を明了にし、命がけて之を日本國民の頭腦に打ち込むべく、奮闘努力せられたのである。

建國の理想精神とはそも／＼何ぞ……

其は外でもない。此の世界を眞實の淨土として一切の生類を救済する。と云ふことで、天神唯一のお仕事は、要するに眞正平和の神國を此の地上に建設するの一事に存するので、其の理想と之を實現すべき實際の力を我皇室に傳へられて居るのであるから、御曆代皇統の清く貴き血筋の中には、連綿として此の精神が宿つて居る。佛様の方で言へば